

国道151号線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

早稲田遺跡 その3

阿南町西条早稲田 久保畑・ハネ地籍

1992.3

長野県飯田建設事務所
長野県下伊那郡阿南町教育委員会

国道151号線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

早稲田遺跡 その3

阿南町西条早稲田 久保畑・ハネ地籍

1992.3

長野県飯田建設事務所
長野県下伊那郡阿南町教育委員会

序 文

前々から計画の進んでいました国道151号線の改修工事が早稲田地籍でも行われるようになりました。この地籍には濃厚な遺跡地帯と知られる「早稲田遺跡」がありまして、昭和54年に宮下地籍の発掘調査が行われ大きな成果を上げています。その後、久保畑地籍の用地買収が進み、この地籍も濃厚な埋蔵文化財包蔵地とされていますので、県教育委員会文化課のご指導を得て、記録保存の発掘調査を計画しました。

阿南町では、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査体制が整っていませんので、この対応に苦慮していました。幸い、調査担当者として松川町教育委員会酒井幸則氏・飯田市座光寺の今村善興先生のご承諾を得、有為な調査員・調査補助員の方々のご協力をいただき、各年次の緊急調査体制を整えることができました。発掘調査は、用地事情もありまして、昭和63年・平成元年・平成3年に互って終了することができました。

発掘調査の結果は、報告書本文にありますように、久保畑地籍・ハネ地籍ともに遺物出土が多く、重要な遺構の検出ができました。とくに、久保畑地籍では雄大な溝址の発見が続き、地域的にも例の少ない縄文時代早期の遺物出土・縄文時代晩期の遺物集中等がありまして、早稲田遺跡の特質が検証されています。この中で、縄文時代晩期の遺物集中地が各所にありますことは、下伊那地方南部地域における東海・三河からの稲作文化伝播一拠点として、「早稲田遺跡」の重要性をますます高める調査であったと自負しています。

報告書刊行に当たりまして、献身的にこの調査を推進して下さった酒井・今村両調査団長ほか調査員・調査補助員のみなさま、深い包含層のためにご苦勞の多い検出作業に専念くださった協力作業員のみなさま、この発掘調査遂行に温かいご配慮を賜った地権者・近隣の方々、飯田建設事務所・阿南町建設課のみなさまに厚くお礼を申しあげます。

平成4年3月

阿南町教育委員会教育長 小林陽美

例 言

1. 本報告書は、昭和63年・平成元年・平成3年阿南町教育委員会が実施した、国道151号線早稲田地籍改良工事に伴う早稲田遺跡ハネ・久保畑地籍の発掘調査報告書である。
2. 早稲田遺跡の発掘調査は、阿南町教育委員会がそれぞれの年度に委嘱した特設発掘調査団が当たっている。
3. 各年次の整理作業は、年度後半に一部済ませてはいるが、他地区の発掘調査が続いているので、平成3年10月から平成4年2月にかけて、遺物整理・整図・執筆作業をしている。
4. 三年次に互る調査のために、層位別の遺物整理が困難なこともあり、時期別・土層別遺物選別がやや入り組んだきらいがある。とくに、久保畑地籍B地区の場合は、その傾向が強い。
5. 本報告書の資料作成に当たっては、現場での遺構計測は今村・林・小林が当たり、現場の写真撮影は今村が担当している。遺物整理・遺物実測・拓本撮りは、林・福田・小林・今村俱が当たり、遺構整図・編集・執筆は今村が担当している。
6. 大下条の歴史的環境は「早稲田遺跡その2」の松沢の報文を再録している。
7. 遺物写真撮影・大下条地区の史跡等の写真撮影は、唐木孝治氏に委託している。
8. 遺物・原図類・調査記録カード・写真・調査日誌等関係資料は、一括して阿南町教育委員会が保管している。



溝址 2 出土 縄文時代早期土器



溝址 2 出土 縄文時代早期石器

早稲田遺跡その3 目次

序 文 阿南町教育委員会教育長
 例 言
 口絵写真 縄文時代早期 土器・石器

| | |
|--|----|
| I 調査の経過 | 1 |
| 1. 宮下地籍の発掘調査 | 1 |
| 2. 早稲田地籍の詳細分布調査 | 1 |
| 3. 久保畑地籍の発掘調査 | 1 |
| (1) 久保畑地籍1年次調査 | 2 |
| (2) 久保畑地籍2年次調査 | 2 |
| (3) 久保畑地籍第3次・ハネ地籍の調査 | 3 |
| (4) 整理作業 | 4 |
| 4. 調査団組織 | 4 |
| II 大下条の環境 | 5 |
| 1. 大下条の遺跡分布 | 5 |
| (1) 和知野地籍の遺跡 | 6 |
| (2) 古墳を中心にした遺跡 | 7 |
| (3) 早稲田・深見地籍の遺跡群 | 7 |
| (4) 戦国の武将、関・下条氏にまつわる遺跡 | 8 |
| (5) 中谷・御供の遺跡群 | 9 |
| (6) 川田地籍の遺跡 | 9 |
| 2. 阿南町大下条の歴史的背景 | 13 |
| (1) はじめに | 13 |
| (2) 関氏と下条氏の興亡 | 14 |
| (3) 早稲田神社と早稲田地籍の古字・古社寺・及び中世遺物出土地について | 24 |
| (4) 大山田神社旧鎮座地(伝承)と寛文期の深見の池の様子 | 32 |
| III 調査の結果 | 39 |
| 1. 調査結果の概要 | 39 |
| 2. 土壌群 | 39 |
| (1) 弥生時代の土壌 | 39 |
| (2) 縄文時代晩期の土壌 | 41 |
| (3) 縄文時代後期・中期の土壌 | 41 |
| 2. 溝址 | 42 |
| (1) 溝址1 | 42 |
| (2) 溝址2 | 42 |
| (3) 溝址3 | 53 |

| | |
|--------------------|----|
| 3. その他の遺構 | 58 |
| (1) 旧道跡 | 58 |
| (2) 近世以降の堅穴址 | 58 |
| (3) 石組遺構 | 58 |
| 4. 主な遺物 | 59 |
| (1) 縄文時代早期の遺物 | 59 |
| (2) 縄文時代後・中期の遺物 | 59 |
| (3) 縄文時代晩期の遺物 | 59 |
| (4) 弥生時代の遺物 | 60 |
| (5) 縄文時代晩期・弥生時代の石器 | 82 |
| (6) 中世・平安・古墳時代の遺物 | 83 |
| IV 調査のまとめ | 97 |
| 1. 広範囲に亘る遺物出土地 | 97 |
| 2. 溝址2と縄文時代早期の遺物発見 | 97 |
| 3. 縄文時代晩期の遺物集中 | 98 |
| 4. 早稲田遺跡の保護 | 98 |

挿 図

| | | |
|------|----------------------|----|
| 第1図 | 大下条地籍遺跡分布図 | 12 |
| 第2図 | 早稲田地籍古字図 | 29 |
| 第3図 | 早稲田遺跡周辺地形図 | 38 |
| 第4図 | 久保畑地籍の遺構配置図 | 40 |
| 第5図 | 久保畑地籍B地区上層遺構図 | 43 |
| 第6図 | 久保畑地籍B地区土壌群全体図 | 45 |
| 第7図 | 中世・弥生時代の土壌群 | 46 |
| 第8図 | 縄文時代晩期の土壌群 | 46 |
| 第9図 | 縄文時代後期・中期の土壌群 | 47 |
| 第10図 | 石組、弥生・縄文時代晩期の土壌 | 48 |
| 第11図 | 縄文時代晩・後・中期の土壌 | 49 |
| 第12図 | 深鉢・土偶・耳栓・壺口縁・石棒・天目茶碗 | 50 |
| 第13図 | 溝址1・溝址2 | 51 |
| 第14図 | 溝址2出土の縄文時代早期土器 | 54 |
| 第15図 | 溝址2出土の石器(1) | 55 |
| 第16図 | 溝址2出土の石器(2) | 56 |
| 第17図 | C地区溝址3と土壌 | 57 |
| 第18図 | B地区出土縄文時代土器(1) | 61 |
| 第19図 | B地区出土縄文時代中期土器(2) | 62 |
| 第20図 | B地区出土縄文時代中期土器(3) | 63 |

| | | |
|------|----------------------|----|
| 第21図 | B地区出土縄文時代中期土器(4) | 64 |
| 第22図 | B地区出土縄文時代中期土器(5) | 65 |
| 第23図 | B地区出土縄文時代中期土器(6) | 66 |
| 第24図 | B地区出土縄文時代中期土器(7) | 67 |
| 第25図 | B地区出土縄文時代中期土器(8) | 68 |
| 第26図 | B地区出土縄文時代中期土器(9) | 69 |
| 第27図 | B地区出土縄文時代晚期土器(1) | 70 |
| 第28図 | B地区出土縄文時代晚期土器(2) | 71 |
| 第29図 | B地区出土縄文時代晚期土器(3) | 72 |
| 第30図 | B地区出土縄文時代晚期土器(4) | 73 |
| 第31図 | B地区出土縄文時代晚期土器(5) | 74 |
| 第32図 | B地区出土縄文時代晚期土器(6) | 75 |
| 第33図 | B地区出土縄文時代晚期土器(7) | 76 |
| 第34図 | 久保畑地籍C地区出土土器 | 77 |
| 第35図 | ハネ地籍興亜電工工場土手出土土器 | 78 |
| 第36図 | 久保畑地籍B地区出土弥生時代土器 | 79 |
| 第37図 | B地区出土弥生時代土器と陶器類 | 80 |
| 第38図 | B地区出土陶器 | 81 |
| 第39図 | 石組下・土壇1～土壇30出土石器 | 84 |
| 第40図 | 土壇31～土壇70出土石器 | 85 |
| 第41図 | 土壇71～土壇92出土石器 | 86 |
| 第42図 | B地区溝址1・C地区溝址3出土石器(1) | 87 |
| 第43図 | C地区溝址3出土石器(2) | 88 |
| 第44図 | B地区B～E列出土石器 | 89 |
| 第45図 | B地区F列出土石器 | 90 |
| 第46図 | B地区F～G列出土石器 | 91 |
| 第47図 | B地区G～H列出土石器 | 92 |
| 第48図 | B地区H～I列出土石器 | 93 |
| 第49図 | B地区I～K列出土石器 | 94 |
| 第50図 | B地区K～N列出土石器 | 95 |
| 第51図 | B地区O～V列出土石器 | 96 |

写 真 図 版

| | | |
|-----|---------------|-----|
| 写図1 | 早稲田遺跡遠望と久保畑地籍 | 99 |
| 写図2 | ハネ地籍と久保畑地籍C地区 | 100 |
| 写図3 | B地区土壇群(1) | 101 |
| 写図4 | B地区土壇群(2) | 102 |
| 写図5 | B地区土壇群(3) | 103 |

| | | |
|------|-------------------------------|-----|
| 写図 6 | 石組 1 と下層の土壌群 | 104 |
| 写図 7 | 西南側の土壌群 | 105 |
| 写図 8 | 土壌 4・10 | 106 |
| 写図 9 | 土壌 1・2 | 107 |
| 写図10 | 土壌12ほかと土壌83 | 108 |
| 写図11 | 土壌 102・105 | 109 |
| 写図12 | 土偶と石棒出土状況 | 110 |
| 写図13 | 溝址 2 の西側全景 | 111 |
| 写図14 | 溝址 2 西南縁の転石群 | 112 |
| 写図15 | 溝址 2 の土層断面 | 113 |
| 写図16 | 東側 I・H の土層断面 | 114 |
| 写図17 | 東側 I・7 下層の土層 | 115 |
| 写図18 | 溝址 2 の東北部 | 116 |
| 写図19 | 溝址 2 I・7 早期土器集中地 | 117 |
| 写図20 | C地区溝址 3 | 118 |
| 写図21 | 溝址 3 の西側の土壌 (火葬墓) | 119 |
| 写図22 | C地区旧道跡 | 120 |
| 写図23 | ハネ地籍 | 121 |
| 写図24 | 深鉢・壺頸部・耳栓・土偶 | 122 |
| 写図25 | B地区出土縄文時代早期、中期土器口縁 (1) | 123 |
| 写図26 | B地区出土縄文時代中期土器口縁 (2) | 124 |
| 写図27 | B地区出土縄文時代中・後期土器 | 125 |
| 写図28 | B地区出土縄文時代晩期土器口縁 (1) と底部 | 126 |
| 写図29 | B地区出土縄文時代晩期土器口縁 (2) | 127 |
| 写図30 | B地区出土縄文時代晩期土器片と底部 | 128 |
| 写図31 | C地区・溝址 3 出土土器 | 129 |
| 写図32 | ハネ地籍出土の土器 | 130 |
| 写図33 | B地区出土弥生時代中・後期土器 | 131 |
| 写図34 | B地区出土石器と古墳・平安時代・中世陶器 | 132 |
| 写図35 | B地区出土大形打石器 | 133 |
| 写図36 | B地区出土小形打石器 | 134 |
| 写図37 | B地区出土小形打石器・横刃形石器・緑色片岩石器 | 135 |
| 写図38 | B地区出土石棒・磨製石器・錘石・弥生時代石器 | 136 |
| 写図39 | 久保畑 C地区・ハネ地籍出土石器 | 137 |
| 写図40 | 溝址 3 下層の検出作業 | 138 |
| 写図41 | 土壌群検出と溝址 3 検出の作業 | 139 |

I 調査の経過

1. 宮下地籍の発掘調査

国道151号線改良工事に伴う早稲田遺跡宮下地籍の発掘調査は、昭和54年8月早稲田神社前の試掘調査が行われ、同地籍の本格的な発掘調査は昭和56年6月～9月まで行われ、昭和62年12月には神社前南側の調査が行われている。

神社前宮下地籍北側では、縄文時代晩期竪穴址・土器集中地、古墳時代遺物集中地、平安時代竪穴住居址、中世獨立柱建物址・柱穴群・鍛冶工房址・火葬墓・石垣遺構・石列遺構等が検出された。とくに、縄文時代晩期の土器集中出土・中世期の遺構・遺物集中地として注目される遺跡になっている。

縄文時代晩期の土器は条痕系のもを主体にして、東海系の壺王式に近似するものが多く、少量ではあるが水神平系の土器も見られ、この時期の東海系文化の伝播経路を辿る重要な遺跡のひとつになった。中世期の遺物も非常に多く、山茶碗・青磁碗・天目茶碗・常滑の甕・瀬戸灰釉系陶器片の出土が多く、神社前の台地端で検出された竪穴址から集中出土した片口鉢・雪平鍋・小形花瓶の完形土器や、伴出した鉄幣は場所的にみても極めて貴重な遺物として「早稲田遺跡その2」に詳細報告されている。

神社参道南側一帯の調査は、調査対象面積が狭く傾斜面であったことから、遺物出土は少なく、神社参道石階の一部・土壌等の確認に留まっている。

2. 早稲田地籍の詳細分布調査

昭和54年8月、宮下地籍の試掘調査と並行して行われた早稲田地籍の詳細分布調査では、表1の天下条遺跡一覧表・第2図早稲田地籍古字図の中世遺物出土地表でみられるように、ほぼ全域に互って中近世の遺物が採集されている。平安時代・古墳時代の遺物も散見されるが、弥生時代の遺物、縄文時代中期・後期・晩期の遺物は各所で採集され、総体的には縄文時代後晩期・中世遺物の多出土地であることが窺われ、下伊那地方でも特筆される重要遺跡のひとつとして注目されるようになった。数回に亘る宮下・久保畑・ハネ地籍の発掘調査によりこのことが実証され、久保畑地籍の縄文時代中期・早期の遺物多出土は、さらに早稲田遺跡の多岐にわたる重要遺跡の条件を高めている。

3. 久保畑地籍の発掘調査

久保畑地籍とは、早稲田神社のある三島地籍・宮下地籍から東南方、旧興亜電工阿南工場の

南側に位置し、南沢に面する台地先端に広がる遺跡で、縄文時代中期の遺物が多く採集されていた。この発掘調査は国道 151号線の詳細設計・用地交渉が難行したこともあって、調査開始が遅れている。しかも、用地未買収地があったり重層する遺物包含層があったために、北側のハネ地籍を含めて3年次に互って発掘調査が行われている。

- ① 早稲田遺跡第4次調査(久保畑地籍1年次) 昭和63年9月～11月
- ② " 第5次 "(" 2年次) 平成元年6月～9月
- ③ " 第6次 "(" 3年次) 平成3年4月

(1) 久保畑地籍1年次調査

久保畑地籍の発掘調査は昭和63年9月8日から11月26日にかけて行われている。久保畑地籍の台地とハネ地籍の間にある低地をA地区とし、台地上北端からB地区として、さらに50m単位に地区割をして、南側にかけてC・D地区を設定している。この年はまずB地区(伊藤幸美氏宅裏)を主体にしたグリット掘りをしたところ、B地区全体の遺物包含が見られ、とくにST367から北側40m台地端にかけて傾斜地形が続くので、包含層が厚くなり深いところは2m以上に及んでいる。上層から中世、平安・弥生時代、縄文時代晩・後・中・前・早期の遺物包含が確認された。住居址の発見はなかったが、中層の黒色土層中から下部茶褐色土層にかけて竪穴・石組・土塼・焼土群が重複し、土塼の検出だけで100基を越えている。さらにその下層には縄文時代早期の遺物が包含される大形な溝址があることが確認されたが、B地区の土塼群を主体にする調査で終わっている。

確認された主な遺構

近世集石遺構 1、石組遺構 2、弥生時代土器集中地(含焼土塊)1、弥生時代後期・縄文時代晩期・同後期・同中期の土塼 101、縄文時代中期の遺物を包含する溝址 1、縄文時代前・早期の遺物を包含する溝址 1。

(2) 久保畑地籍2年次調査

久保畑地籍の2次調査は平成元年6月21日から8月31日にかけて行われている。この年はまずB地区の下層を中心にして、溝址2の検出作業を進めている。西側用地境に土層断面図を作成するために掘り下げを進め、縄文時代早期の土器片・石器が下層の砂質土から検出されている。東側の本調査地籍(伊藤幸美氏宅裏の一带)に重点を置き、残された上層部分を含めて層序別の検出作業を進める。上層から弥生時代・縄文時代晩期の土器、中層から縄文時代中期の土器が出土し、焼土を伴う土塼(103～105)が検出され、溝址の最下層面からは縄文時代早期(茅山系)土器片・石器完形・剥片等が多く出土し、東側壁添いには早期壘形土器一具体

(第14図)のほかアンビル状の平石もいくつか発見されている。溝址全体は排土の都合上中間部を一部未検出で残したが、台地を斜めに横切る雄大なもので、古い時代の流路跡状の溝址であることが検証され、その堆積上面に縄文時代・弥生時代の土壌群が構築されたものが検出されている。東側はとくに深く表土下3mに及ぶところがあるために、検出調査は7月末までかかっている。8月へ入ってC・D地区のグリット掘りに入ったが、中央の台地上ST368周辺は地形的には条件が良いと思われたが、表土が浅く中近世の陶器片のほかは遺物出土が少なく、遺構は近世の道路跡・時期不詳の竪穴状遺構の検出に留まっている。

台地の南端に近い辺りからは遺物出土が多くなり、黒色土の堆積が深いところがあった。掘り下げるとこれが溝址3である。この溝址も幅3m以上、深さも2m以上もある大きな溝で、地形に沿って東西に走っている。縄文時代晩期の土器片・石器等の出土が多く、西側上方に近いところからの出土が多いことがわかった。西側土層断面調査の掘り下げ中に、上部褐色土・黒色土中から天目茶碗・陶器片を伴出する土壌(106)・火葬墓と思われる集石遺構(107)等が検出されている。西側用地境は用地状況と断面崩落防止のために残さざるを得なかったが、西側ほど遺物出土が多かったので西側用地外の緩傾斜面に遺構の存在が予想された。

南側の南沢に面する傾斜面から低地にかけての一带は、重機によりトレンチ調査を実施したが数点の陶器片の発見に留まっている。

C地区で検出された主な遺構

近世旧道跡 1、近世以降の竪穴址 1、中世土壌 2、火葬墓状集石 2、縄文時代晩期生活址(焼土群と土壌) 1、縄文時代晩期の遺物包含の溝址 1。

(3) 久保畑地籍第3次・ハネ地籍の調査

遅れていた未買収地籍の用地買収交渉が解決したので、平成3年4月1日から9日にかけて調査している。久保畑地籍はA地区の北側、台地の北端に近い西側用地境を掘っている。第1次調査で検出した溝址1の所在調査が主であった。転石の非常に多いところで検出が困難ではあったが溝1の上部が検出されている。

ハネ地籍では西側の掘削面(旧興亜電工阿南工場造成時の掘削面)の土層調査と、工場用地の南側の傾斜面の遺物包含層の有無を確かめる調査をした。西側の掘削面は写図23で見られるように上部黒・褐色土の堆積が薄く確たる包含層は見つかっていない。旧興亜電工敷地から南側の低地にかける傾斜面には、表土下70~80cm辺りに黒色砂質土・茶褐色砂混じりの土層中に遺物包含層が残されていることが確認された。包含される遺物は弥生時代の有肩扇状形石器・縄文時代晩期の土器片・石器である。とくに縄文時代晩期の土器片が多く、工場敷地内の北側に続くことが予想された。旧工場敷地はコンクリート張り面が続くこと、道路は埋め土による造成予定であることから包含層の保全が保障されるので、今回の調査は打ち切った。旧工

場の敷地造成は西側を削り、東側は盛り土してあると思われるので、東側ほど包含層が残され、東側に続く「日影地籍」につながる包含層であろうかと予想される。

(4) 整理作業

久保畑地籍各年次の整理作業は、その年次の後半に一部進めてはいるが、他地区の発掘調査が続いたので、本格的な整理作業は平成3年12月から平成4年2月にかけて報告書原稿作成作業を進めている。

4. 調査団組織

(1) 宮下地籍第3年次調査団

調査 団長 酒 井 幸 則 (松川町教育委員会社会教育主事 日本考古学協会員)
協力作業員 南 島 昂 小林 匡 志 佐々木 勝 人 松 下 知 直
佐々木 文 男 杉 木 鷺 男 丸 山 直 後 藤 忠 人
伊 藤 幸 美 南 島 松 江 松 沢 喜 夫 勝 又 伸 一
村 松 光 基

(2) 久保畑・ハネ地籍調査団

調査 団長 今 村 善 興 (長野県文化財保護指導委員 日本考古学協会員)
調 査 員 林 貴 福 田 千 八 小 林 薫
協力作業員 勝 野 竜 夫 松 下 知 直 丸 山 直 石 田 利 夫
南 島 昂 小 林 匡 志 位 高 邦 夫 後 藤 忠 人
伊 藤 幸 美 勝 野 吉 治 串 原 福 人 奥 村 正 博
熊 谷 四 郎 青 谷 岩 男 伊 藤 隆 関 内 博 邦

(3) 調査事務局

教育委員会教育長 小 林 陽 美
" 係 長 生 嶋 義 信 (昭62～平成元)
" " 金 田 修 (平成2～)

Ⅱ 大下条の環境

1 大下条の遺跡分布

阿南町は、旧富草村・大下条村・和合村・旦開村の4か村が昭和32～34年に合併してできた町である。大下条村は、江戸時代は前項のように14か村に分かれていた。

大下条は、北は富草、西は下条山脈の南端をはさんで和合、南は和知野川を境にして、天龍村長島・神原、東は天竜川の狭い谷をはさんで泰草村に接している。西は下条山脈の西峰八尺山、(1218)の支脈が屏風の如くそそり立ち、そこから流れ出る河川は、富草地区を流れ下る大沢・門原川、南は天竜村境を流れる和知野川が大きく、その間に早稲田・深見を流れ下る千木沢があって、その支流も数多く、夫々が深い侵食谷を作っている。国道151号線が南北走する辺りには大きな断層線があり、そこから西高東低の尾根状台地がいくつも東走し、やがて天竜川へ急に落ちこむ地形を示している。この傾向は富草地区に著しく、大下条では川田・神子谷・御供地区のような川岸に広めの台地を持つ所もある。台地といっても、川田・御供あたりを除いては、山あり、谷あり、小河川ありで、起伏に富んだ複雑な所である。東西に走る道路もそうであるが、南北を連ねる道路はつづら折の上り下りの多い道路ばかりで、地形が大きく通行の妨げになっている。これは、富草・大下条を中心にした第三紀中新世の地層が広く分布しており、この地層は比較的軟かい岩石からできているため、崩れ易く河川に侵食され易いからである。

この第三紀層は「富草層群」と呼ばれる地層で、化石の多く含まれる地層で知られている。層序表によれば、大下条地籍の場合、和知野層(最下層)、御供・中谷地区の温田層、早稲田・深見地区の大下条層、田上・平久両面に見られる栗野層等によって構成されている。この地域は各所に第三紀層の露頭が見られ、凝灰岩塊が地表面に露出する小台地も多い。地形的に見れば、遺跡立地が良さそうな所であっても、凝灰岩の露出する所では、古い時代の遺物は殆んど発見することができなかった。

現在の生活舞台の中心は、標高400m～600m位の所で、いずれもが第三紀層の岩石の風化によって生じた土壌であって、肥沃であり、水田耕作には適していると言われる。各所に東走する台地上や、南面する傾斜地は、肥沃かつ気候温暖もあって人々の生活は多い。この地方は、温帯樹と暖帯樹(カシ・ツバキ)が自生していて、植物分布上でも注目すべき温・暖帯植物の混生する地域として知られている。(暖帯樹の北限ともいわれている)

このように起伏の多い地形の複雑な所ではあるが、土質や気候に恵まれた地域でもあり、又、先進文化のすぐれた東海地方に近い地域でもあるため、古代文化の栄えた所と考えられるが、国道151号線の改修も遅れ、主要地方道路の改良も不十分で、近代産業の発展し難い開発のおくれた後進的な地域の一つであるように、複雑な地形と相俟って地域調査も遅れがちである。考古

学の調査は一部の地域を除いては、飯田盆地周辺に比べると余り進んでいなかった。古くから地区内各地籍から土器・石器が見つかり、散布地も多い割に発見された遺物が散逸したり、紛失等もかなりあって、実態がなかなか把握できない地域である。わけても、学術調査例も余りなされていないため、考古学の面では未開の地域と言えよう。昭和54年頃から実施された町史資料の地区内分布調査の結果、予期以上に土器・石器の出土量の多いことがわかりつつある。とくに大下条地区には特長の多い遺跡が見ついている。時代的に見ると、出土の量は多くないが、縄文時代早・前期の遺物もあり、縄文時代の中期の遺跡も多い。表1の遺跡一覧でわかるように、縄文時代後・晩期の遺跡の多いことがわかりつつある。とくに後述の、和知野遺跡や早稲田遺跡の東海地方の影響の強い糠王・水神平系の条痕文土器、早稲田遺跡の宮下・日カゲ地籍の掘之内式土器や、晩期の条痕文土器の発見はその例である。弥生時代前・中期の土器は和知野の他は発見されていないが、天竜村の例から推してその発見には期待がかけられる。弥生後期のものは各所にある。古墳時代の土器は、古墳から出土したものが大部分であるが、土器片は各所から出ている。大下条は富草と共に、阿南地方では古墳の多い所で、富草と同様七基と多い。構築法に三河系手法が用いられている所に特長がある。奈良・平安時代の遺物出土地も調査の度に増加している。中世中葉から後葉の遺物出土地は多い。一覧表でもわかるように21遺跡中9遺跡に及び、早稲田遺跡に至っては、全地域から各種陶器片の出土が見られる。この事は、早世田神社がこの地に存在したこと、大山田神社が古くはこの地にあったと伝えられること、三河地方からの古族の移住とこの地への拠点化、それに伴う集落・城跡の存在等々、今後の調査に期待される分野の多い地域の一つとして注目される。

当大下条地域の遺跡群を、遺物の分布状況や、遺構、地形等からいくつかまとめてみると、次のような特徴として概括することができる。

(1) 和知野地籍の遺跡

和知野地籍は、大下条の最南端にある。下条山脈が和知野川（上流は和合川・売木川・渡合川等）によって東北に切られて終る部分の南面傾斜地であって、和知野川によって深く侵食を受けた第三紀層の低い河岸段丘の崖面台地上にある。大下条から新野へ向かう国道151号線の見名地籍から見ると、ずっと低い谷底に見える位置にあって、標高320mほどの所にある。和知野川を境にして天竜村に接し、洞底状の南面台地にあるため、当地方では平岡と共に最も暖かく、冬雪は降っても、積雪を見ることは殆んどない所である。

この遺跡は大正頃から知られていて、大下条の主要遺跡の一つである。大下条には数少ない縄文時代早前期のほか全期と、弥生・古墳時代のものも多いとされていた。とくに昭和31年頃、大下条小学校和知野分校の拡張工事中発見された縄文時代中期末葉の住居址を第1号址とし、昭和53年には、旧分校跡地を和知野区老人クラブの方々を整備作業中、1号住居址の近くから、2・3号住居址が発見されて、地域の人々の脚光を浴びている。其の後の分布調査、耕作等で発見、

保管されている遺物調査の結果、平安時代灰釉陶器片や、中世青磁片をはじめ、各器種陶器片の出土の多いことがわかってきた。とくに、縄文時代中期の相当規模の集落存在は前記の通りであるが、縄文時代後晩期の遺物が多く、とくに東海系の条痕文土器片の発見の多いことがわかった。このことは、下伊那地方南部県境地域に分布する条痕文土器出土地と関連するものであり、新野地区や、天竜村瀧島南遺跡からの土器とも類似しており、南部の縄文時代晩期の拠点遺跡の一つとして注目されよう。水神平系・貝田町系土器もあり、中島式土器の発見もあって弥生文化の変遷を知るにも重要資料の提示できる遺跡であろう。古墳時代・平安時代の遺物もあること、更に中世中・後葉の遺物発見の多いことも見逃せない。遺跡内に塚谷古墳があったこと、対岸山中には関氏最後の居城「権現城」があり、城の眼下にあるこの台地は何らかに使われたであろう。落城にまつわる伝承の地も多く、中世遺物出土地は更に増えるものと考えられよう。平久や早稲田にかかる上方傾斜面には日影林遺跡もあり、縄文後期の遺跡であることから、この他にも小遺跡の発見も予想されそうである。

(2) 古墳を中心とした遺跡

表1の遺跡一覧表のように大下条地籍には7基の古墳があったが、和知野に1、西条・小野平久に4基、北条の川田・大平に2基である。和知野の1基を除くと立地が共通し、一つの群をなしている。下伊那でも竜西阿知川以南は古墳が少なく、全部で30基余、下条の17基を除くと富草大下条に14基である。和知野の塚谷古墳を除くと小野・平久のグループ、富草の上粟田を含めた北条のグループに分かれる。いくつかの共通点をあげると、第一は立地が低山地の中腹、ほぼ標高500mほどの位置に点在すること、第二は、それらの古墳前方には、三ヶ月状低湿地又は湧水利用の水田地帯に面していて、古代水田の面影を残している。第三は、その近くから僅かな古墳期の遺物発見はあるものの、集落と思われる遺跡は見つかっていない。第四は石室の残されているものは富草の上粟田古墳を含めても4基であるが、この地方特有の粗粒砂岩で、風化されやすい岩石を用いた横穴石室である。第五は、全部ではないが、横穴石室内部構造は羽子板状、天井部はアーチ形、中には二室に分かれているような形跡が見られ、構築技法が多分三河系古墳に類似している等である。或いはこの他に古墳の存在も予想されるが、今の所はっきりしない。古墳築造の人々の集落、水田耕作等の生産地を物語る遺物出土地等の発見もなく、今後に残された課題の大きい遺跡群である。

(3) 早稲田・深見地籍の遺跡群

前述した第三紀層の風化土による肥沃、耐水性の土壤と、深見の池等の豊富な湧水によって、起伏・傾斜の多い地形でありながら、古くから有数な米作地帯で知られている。又松沢の報文にあるように、古代・中世文化史上特色のある地域である。即ち、早稲田には国史現在社の式外社

和世田神社（現早稲田神社）があり、摂社・末社、神宮寺等があったと思われる。深見山田地籍には、延喜式所載の「大山田神社」（現下条村鎮西）の最初の鎮座地と伝承される所がありながら考古学的には余り調査が進んでおらず、早稲田遺跡は、現在の興亜電工工場敷地あたりから、東方斜面に位置する日カゲ地籍を呼んでいたと思われる。早稲田神社前宮下地籍の発掘調査の結果は予想外に大成果をあげ、関連して実施した分布調査によると、遺跡一覧、とくに早稲田地籍別表にあるように、早稲田地籍全域にわたって遺物分布のあることがわかった。時期別濃淡についてははっきりしないが、和知野遺跡に次ぐ有力遺跡であることが実証された。縄文時代早・前期のものはごく僅かである。同中期のものも大量発見はないが、興亜電工敷地（ハネ、日カゲ）から久保畑あたりかと考えられる。縄文時代では晩期のものが主で、日カゲ地籍で拾える土器片や石器の量が多く、宮下地籍でもこの時期の生活面が確認されている。弥生時代では前期の水神平系土器が発見され、後期のものもある。古墳期のもも見られる。平安期になると量を増し、出土の範囲も広い。中世陶器に至っては早稲田地籍全域に広がり、量も種類も多く、早稲田神社や関氏諸城に関連する城館跡、集落の存在を如実に物語り、下伊那郡下における中世期の重要遺跡の一つとして注目されている。

深見地籍では、深見池周辺の台地上で、弥生・平安・中世の遺物が発見され、小野地籍の旧吉沢家跡（青ナシ）、田中・山田地籍では、古墳須恵器、平安灰釉や土師須恵器片のほか、各種の中世陶器片の発見が続き、古伝承を実証する重要な発見となっている。元々傾斜の強いこの辺りの地形であるので、僅かなテラス状小台地からも今後の発見が期待されることと思う。

（4）戦国の武符、関・下条氏にまつわる遺跡

古墳期から平安末・中世文化の発展に伴い、この大下条地籍は、阿南地方の古代・中世文化の中心地であったことは明瞭である。伊勢を本拠とする戦国の武符関氏が新野へ拠をかまえ勢力が増すにつれ、この温暖で肥沃な大下条地区に目を向けなければならないが、だんだんと早稲田・深見地区へと勢力を拡張してきている。この関氏より少し前に、富草地区の古城に拠を構え、早稲田・深見地方へも勢力を伸ばして来ている下条氏との間に抗争が始まるのは当然の事で、永正の頃以後、関氏・下条両氏の激烈な当地域の争奪戦が展開された。この抗争の拠点となった城跡・見張り台（のろし台）・砦等が、早稲田や深見を見おろす周囲の高台の各所に作られたであろう。これらの場所が数か所現存するのも大きな特徴の一つといえる。これらの城跡等は山林内にあるため遺物包含の調査が進んでいないが、今後、遺物の発見も期待されるであろう。城跡があれば、城主や家臣団の居館址もあるはずで、小野青ナシ遺跡周辺のように、旧家老館址から中世陶器片多量出土の例があるように、新事例が増加すると思われる。

（この項については、松沢の報文参照。）

(5) 中谷・御供の遺跡群

深見の池の北上方に立つ半僧山の東側に不規則な段丘状地形を作りながら天竜川に落ち込むあたりに御供の台地がある。川の侵食によって二分された形になっている。阿南高校のある羽根平遺跡は、この地区唯一の先土器時代のポイントが出土し、古墳時代の土師・須恵器が出土している。県道早稲田・温田線を間して、急崖の上の阿南高校第二グラウンド造成地はイナバ遺跡で、ハマイバの名前もある。尾根状地形の先端部にあたり、眺望もよく砦としての立地は優れている。先端部の発掘調査の結果、城郭を徴証する遺構は確認できなかったが、丘腹には何条かの帯曲輪状の地形があり、台地の尖端をとり巻く石積があったこと、僅かながら中世末の陶器片の出土もあって、この周辺も詳しく調べてみたい所である。

川の北に広がる御供集落地は、宅地造成の遺んだ所で、空地や、僅かな畑地での表面分布では遺物は発見されていない。御供・神子谷の地字名は、早稲田神社の祭祀にまつわる地域名と伝承されることもあって注目したい所でもある。

南宮峽上流で東へ大きく湾曲し始めるあたりの河岸段丘上の小台地が神子の谷である。水田も多く遺物は探しくかったが、一部の畑で、古墳・平安期の土師器、須恵器片が発見されたことは収穫であった。

(6) 川田地籍の遺跡

川田地籍は天竜川に面する下平から何段かの段丘地形が形成され、地形的には段丘面も広く立地条件は整っているが、下平を除いては水利の便はよくないためか、遺物の分布はまばらである。縄文時代中期の散布地とされているが、今回の調査結果も同様であった。下平の段丘崖では数点の石器が採集されている。天竜川に面する最下段においては、遺物の採集はできなかったが、平岡ダムの影響により、往古よりは相当の水位の上昇が考えられるので、泰阜村温田遺跡のように水没又は、泥かぶりの遺跡があらうかと思われる。

表2 大下家古墳一覽

| No | 部落 | 古墳名 | 町村番号 | 登録番号 古 | 立地 | 外形 | 内部施設 | 副葬品 | 現状 | 備考 |
|----|-----|-------|------|-----------|--------|-----------------|------|--------------------------------|----|------------------|
| 22 | 川田 | 堤林 | 27 | 2941 | 丘陵南面中腹 | | | 直刀, 須臾器, 同片 | 消滅 | |
| 23 | 大平 | 大平 | 33 | 2942 | 丘陵南麓 | 円 5.4×11.6 0.6 | 横室 | 須臾器片, 刀子, 鉄鏃 金属片, 土師器片, 須臾器 | 半壊 | 室露出 |
| 24 | 小野 | 大畑 | 42 | 2943 | 丘陵南面中腹 | 円 9.8×9.8 3.1 | 横室 | 勾玉, 須臾器片 | | 壺天井部一子, 二室 牙石 |
| 25 | 平久 | 大開上 | 44 | 2944 | 丘陵南面中腹 | | | | 消滅 | |
| 26 | * | 八幡社の塚 | 43 | 2945 | 丘陵南面中腹 | 円 8.5×8.5 1.5 | | 盛刀, 土師器片, 須臾器 同片 | | |
| 27 | * | 圃田塚 | 45 | 2946 | 丘陵南面中腹 | 円 17.6×17.6 3.4 | 横室 | | | 壺天井一子, 牙石 |
| 28 | 和知野 | 塚谷垣外 | 46 | 2947 | 河岸台地 | | | | 消滅 | |

表3 大下家城跡一覽

| No | 部落 | 城跡名 | 町村番号 | 登録番号 | 立地 | 支配者 | 構造 (残存) | 備考 |
|----|-----|--------------|------|------|-----|-----|----------------------|---------------------------|
| 29 | 深見 | 山 砦 (取手山) | (92) | | 山 砦 | 下条氏 | | |
| 30 | 井戸 | 矢草城 | (93) | | 山 頂 | 関氏 | 本郭 曲郭 空壕 | |
| 31 | 早稲田 | 八幡城 | (94) | | 山 砦 | 関氏 | | 仮城?, 八幡社 |
| 32 | 小野 | 上田城 | (95) | | 山 頂 | 関氏 | 本郭 曲郭 空壕 | 関三社, 八幡社 |
| 33 | 和知野 | 権現城 | (96) | | 山 頂 | 関氏 | 本郭 二郭 空壕 (保存状態良好) | 関氏最後の居城 関氏遺跡, 関三社, 八幡社 |



2. 阿南町大下条地区の歴史的背景

1. はじめに

国道151号線で飯田から天竜峡を経て、阿智川を越すと下条氏の居城地のあった下条村に入る。縦に長い下条村を縦断するようにして、南はずれ近くまでくると、一直線に改修された国道は、吉岡城址を真二つに掘り割り、さらに、そこから5分たらずで古城の脇を一気に走り抜ける。古城は現在、阿南町になっている旧富草村にあり、さらにその南が旧大下条村である。飯田から大下条のほぼ中心である阿南町役場所在地まで約40km、車で1時間足らずのところであるが、かつてはこの地一帯が「下条」といわれていて、今でも愛知県側へ行くと一般のあいだでは「大下条」と「下条」を区別せずに、ただの「下条」で通っている。

大下条という呼称がいつ頃から使われていたのか、はっきりしたことはわからないが、文献では明治5年に、筑摩県飯田出張所に差出された書類に「大下条22ヶ村惣代」という書付けがあり正法寺過去帳に「明治5年6月初めて大下条となる」という記載があって、その頃から表に出てくるようになる。この呼称が何によるものか定かではないが、ある人は下条氏発祥の地とされる甲州韭崎・下条の近くに大下条という地籍があるといい、ある人は名古屋を中京というように、下条氏居住地を中下条とし、それに対してこの地を大下条としたのだともいう。いずれにしても中世末にこの地を治めた下条氏にとって、本拠地に近く、温暖で肥沃な米作地帯として下条領の中でも最も重きの置かれた地域であったことは間違いのないところで、下条(氏)とつながった呼称であることも確かなことである。

大下条は、東に天竜川、西は下条山脈、南は和知野川と自然地形に区分され、地形的にも行政区画としてまとまりやすいが、各部落に残る年間行事、風習、盆おどり、祭事などをみても、昔から風土、習慣、人情、宗教的に結びつきが強かったことがうかがえる。

とくに、式外社としての式格を持つ早稲田神社は、現在では早稲田部落の氏神として祭られるにすぎないが、その昔はこの地域に広く信奉されていたことがわかっている。熊谷家伝記、郡史4巻でもあげられているが、平久・井戸・池島・千木・御供・神子谷などの部落名は、この早稲田神社の祭事に関係したものであるといわれている。これらの部落が早稲田神社をほぼ中央に置いて、これをとり囲むように位置しており、この地を領した関氏・下条氏がともに早稲田神社を厚く信奉し、祭事も盛んに行われたことからみても、この神社を中心とした宗教的結びつきはかなり強いものであったことをうかがうことができる。

さて、大下条地区の歴史的背景であるが、この地に関氏・下条氏が進出してくる室町時代になると、ある程度文献によってその姿を知ることができるが、それ以前のごとくとすると平安時代の国史に、式外社として早稲田(和世田)神社、式内社として大山田神社をうかがうことができ、早稲田神社には、鎌倉期の泉宝・鐙口(正応3年=1290=の銘)が残されているが、他にはほとんどみるべき文献資料が発見されておらず、考古学分野の調査に待つところが多い。先史時代、

古墳時代については別項でふれているので、ここでは、この地の歴史を特徴づける関氏と下条氏の興亡史、さらに式外社早稲田神社と早稲田地籍の古字・古社寺などについてと式内社大山田神社の旧鎮座地と伝承される深見部落のことについてふれながら、この地域の大まかな歴史的風土を紹介することにした。

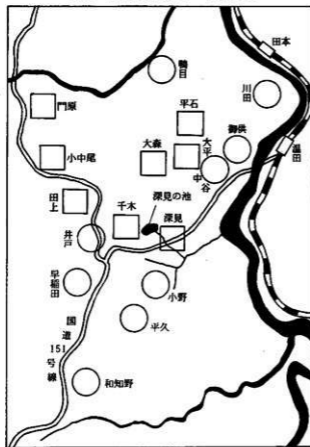
2 関氏と下条氏の興亡

(1) 関氏の進出

関氏については「関伝記」が残されている。「熊谷家伝記」で知られる板部(天竜村)の熊谷直暹が著したもので、関氏滅亡後230年を経たのもであり、記述内容に奇抜とも思える説話もみられて、信ぴょう性を欠くところがあるが、関氏考察には欠かせない貴重な文献である。

これによれば文安5年(1448)に、平氏の流れをくむ伊勢国関氏の一族・関盛春が戦乱を逃れて流浪し、阿南町新野に来て、土地の住民に推されて領主となり、新野に日差城を築いたこと

関氏・下条氏の勢力分野 (大水の頃)



○ = 関方 □ = 下条方

から始まる。いわゆる関郷といわれた地域は、関氏がこの地に来てからのことで、関氏古本領とされる5ヶ村は、新野と向方・福島・長沼(いずれも天竜村)、それに大下条の和知野である。関氏はこの地の開発に力を入れ、次第に勢力を伸長する。新野は千石平、米どころとして知られるが、標高700mを越す冷涼な高地であり、天竜村は平地の少ない山間地である。関氏が力を貯えてくると当然のことながら領地拡張の鋒先は温暖肥沃な米作地である大下条地域に向けられるようになる。ここに、同じく進出しようとしていた下条氏との間に確執を生ずることになった。大永5年(1525)、早稲田において下条氏と戦い、これに勝った関氏は早稲田を領有し、この地に矢草城を築き、さらに、井戸・御供に一族を配して、大下条への進出を確かなものとした。

(2) 下条氏の進出

一方、関氏と対峙することになった下条氏については、佐々木喜庵（大下条千木の住）によって著された「下条記」がある。下条氏滅亡後120年を経たものであるが、記述は資料に忠実に早くから中央に認められ、諸書に引用されるなど信頼の置ける文献として知られている。

これによると、応永元年（1394）に、甲州より武田氏の流れをくむ下条頼氏が、戦乱を逃れこの地に流れ来て、里人の案内で大沢の地に居住した。今の阿南町富草の古城といわれるところで、「以後5代76年間はつつがなく大沢の城に安住す」とある。この地が地理的に不便なところではがって他からの侵略を受けることもなく、平穏のうちに山間の地域を徐々に開発して勢力を拡張していったのであろう。

下条氏は5代で血統が絶え、文明2年（1470）に松本深志城主小笠原政康の子康氏が迎えられている。康氏は下条家中興の祖といわれる人であるが、下条村吉岡に城を築いて移り、鈴岡小笠原氏と深い関係を結んで、これに対立した松尾小笠原氏としばしば戦い、阿知川を越えて、立石・中間・駒場・昼神辺まで進出して、勢力を大いに伸長させた。古城の城は、康氏が伴ってきた母方の伯父、佐々木帯刀に譲っている。

ようやくこの頃から関氏が勢力を拡張して大下条地域に進出し、下条氏をおびやかすようになった。関氏の北上に対して防備の必要から、佐々木帯刀の四男・佐々木将監を千木に住ませ、砦を築いて警備にあたらせた。



小野・上田城址より千木部落を見下ろす
現在は電々公社、阿南町役場など近代ビルが立ち並び
阿南町の中心の観を呈す。うしろの山が「とりで山」

(3) 関・下条両氏の抗争と関氏の滅亡

大下条争奪戦ともいえる両氏の抗争は大永5年、早稲田での戦いで関氏が勝ちをおさめ、この地に地歩を築いてからいっそうはげしいものとなった。当時の勢力分野は図でみるように複雑に入り組んでいる。千木には「将監畑」という字名が残っているが、ここは将監館址と考えられ、その附近の丘陵を「とりで山」と呼んでいるが、これは砦山の意である。関氏の勢力はこの千木を馬蹄形に取り囲んだ形をしており、逆に下条方からいえば、将監を千木に配したことは関氏勢力の真中へ楔を打ちこんだことになり、関氏の築いた矢草城・上田城から見ると、千木を眼下に見おろす形となって、当時の緊迫した様相をうかがい知ることができる。

両氏はしばしば小ぜり合いを起こし、井戸に下条氏が攻め入って、近辺を荒らし、急を聞いて矢草城から兵が向くとすでにひきあげたあとというようなことが重った。このため、矢草城からでは、かん急の際おくれをとることから、関氏は小野に上田城を築いて移った。しかし、ここも防ぎよに不安があるということで、在城2年足らずで和知野川を越えた要害堅固の地に和知野城を築いた。わずか13年の間に三つの城を築いたのである。

このような関氏の備えに対し、危機感をつのらせた下条時氏は、ついに天文10年(1541)、和知野城へ攻撃をかけた。大永5年に次ぐ大きな戦いであったが、この時も関氏の守備は固く、かえって逆襲されて敗走し、追撃を受けて、佐々木帯刀が守備していた大沢古城に引きあげて、かろうじてこたなきを得た。この戦いに勝利を得た関氏は、深見・千木・田上など大下条全城と富草の大半を領有することになり、一口に関領三千貫文といわれる全盛時を迎えた。

深見・千木・田上などが関領になったことについては、この戦いで関氏のものになったとする



矢草城を望む 正面の山頂に広い平垣があり、これを本郭としてところどころに帯曲輪、石垣の跡をのこす。山城であるが規模は大きい。関氏は上田城に移るまで11年をここに住す。

説と、その以前に兩乞いを願うために関氏に降りていたとする説がある。関伝記によると深見坂巻善右衛門・千木佐々木木羽・田上村松太郎左衛門等は元来下条氏の忠臣であったが、関国盛が勇猛果敢で、雷を組みとめ風雨を望み次第にするという風説を聞いて、折から早ばつで下民の苦しむのを見かねて関氏に降参を願ひ出た。とこ

ろが、それは表向きで
 実は国盛を油断させ、
 高慢心をつのらせ、家
 臣に疎ませようとした
 下条側の策略であった
 というのである。事実
 彼等は3年後の天文13
 年（1544）に関氏を
 滅した夜襲に下条方の
 討手の大将として参戦
 している。しかも戦勝
 の褒美として「眼の前
 の敵を主として敬い、
 よく堪忍して成功させ
 た」とそれぞれに領地
 を給わり、あるいは加



見名から和知野部落をのぞむ 段丘上の集落には縄文早期
 をはじめ各期の遺物が出土し、考古学的に注目される。
 和知野川をはさんで右手の山続きの急峻な山頂に和知野城址
 がある。帯川のえん堀で取水されるため水量が少ないが、か
 つては天然の強固な防備線となっていた。

増されているのである。領地の安堵、加増は確かな事実であるから、陰謀説の方が当たっているように思われる。

和知野城は、要害堅固な城で、尋常な手段で落とすことは容易ではなかった。関伝記によれば下条方が間者を使って、領主と領民の間を離反させようとした事例をいくつもあげているが、真偽の程はともかく、謀略戦法は戦国時代の常套手段であり、そのような陰謀は当然あったであろう。

天文10年の戦いに勝って全盛時を現出した関国盛は、しだいにきょう慢な振舞いが多くなり、老臣、宿将等いずれもこれに対して不満を抱くようになった。あいつぐ築城に領民も労役に悩み



和知野城（権現城）の本郭の後方にまつられる三基の墓
 関盛経夫妻と国盛の墓と言われる

領内の人心はしだいに関氏を離れ、筆頭家老古沢伊予までも、こうした関氏を見限って下条氏に内通する。かくして、この状況を読みとった下条氏は天文13年8月、月見の宴で酔い痴れていた和知野城を一挙に急襲した。虚をつかれた関方はこれを防ぐいとまもなく、城主国盛は混乱の中に討死し、城兵の多くが討死、あるいは四散して関氏はいいに滅亡するにいたった。

これを知った一族の新野日差城も、御供の関大隅も早急に下条方に対し、敵意のないことを通じて、ここに阿南一帯下条氏に帰した。

余談になるが、この戦さに不思議な話が残っている。関伝記にも下条記にもでている。

関氏を討ちとった翌日、討手の者共は吉岡城に揃って、首尾を報告し、よろこんだ城主から各人が褒美をあてえられた。この中に大那木の惣十郎という中間がおり、額にコブがあったので、昔からコブと呼ばれていたが、このコブなかなか力が強く、前夜の戦いで、関国盛に初太刀をあげさせた。その功によって米10俵を拝領し、得々として皆と一緒に帰途についた。ところが途中から狂い出し、小中尾の花の木沢の前まで来ると、急に大声をあげて「おのおの、油断めさるな、あれに関新蔵（国盛）殿来たる」と叫んだ。みると道上の草むらの中から一匹の山犬がおどりで、コブのど笛をただ一口に食い切ると、あっという間に山の中に走り去ってしまった。皆おどろいて近寄ってみると、すでにコブは息絶えていた。初手を自分が討ったと思う心のまよいで山犬が関殿に見えたのであろうか。あるいは殿の亡魂が山犬になって現われたのであろうかと、数十人の目の前で起ったことにおそれおののいたというものである。関伝記では、小野の惣十郎の侍で犬坊という国盛に可愛いがられた小者で、当夜恩を忘れて裏切ったものであり、山犬は国盛が手馴れさせていた飼犬であったとしている。

室町時代の初期から信州南端の関郷に雄を誇った関氏も、ついに下条氏に滅ぼされ、以後下条氏はこれまで関氏の領有していた地域も加えて、急激にその勢力の拡大をみるにいたった。

大下条もこれ以後、下条氏が家康によってとりつぶされる天正15年（1587）まで、下条氏の支配下におかれる。下条氏の滅亡は関氏滅亡の43年後のことであった。

(4) 大下条の郷主と関氏の城跡



小野・日比原にある吉沢伊与の供養塔 享保18年の建立、後方の田んぼは伊予の屋敷あとと言われ、田を掘るとき中世陶器片が多数出土された。水害のため吉沢宅は見名に移ったとされている。

【郷主】

当時、各村には郷主と呼ばれる有力者がいて、関・下条両氏のいづれかに属して働いたことが知られているがその中から両氏の抗争に重きをなした郷主について、2、3ふれておきたい。

吉沢伊予 関氏きっての重臣で、小野に居住した。大永5年の戦いで小野が関領になっ



見名・吉沢宅に伝わる関氏ゆかりの品々



坂巻長玄（善右衛門）の墓 享保14年建立のものである。旧阿南町役場裏の旧道脇に盛土をして、その上に建てられている。

坂巻善右衛門（長玄） 深見の郷主で、下条百騎に入っており、豪勇で知られた。天文10年に千木の佐々木出羽と共に、関氏に降りる。早ばつが続き雨乞いを願うために関氏に下ったとされているが、実は下条方の策謀であったようで、天文13年の夜襲のときは下条方の討手の大将として活躍している。この戦功で、新たに平久の内大塚を給わった。深見は下条方の中でもとりわけ大きな村で、自然湧水による肥沃な水田地帯を持つだけに、近隣の郷主の中でも有力な郷主であった。

深見の正法寺は天正16年に坂巻善右衛門の創建になるものである。嫡子が早世したために、所有していた田畑・家財を残らず法体とし、自らも僧となって永元と称した。現在下条方の大部分が、正法寺の檀家である。寺内に水月堂と呼ばれる観音堂があり、十一面観音像を祀る。

佐々木将監 千木に将監畑という地目があり、将監館址と考えられる。この一帯をとりて山と呼んでいるが、これは砦山であり、今もわずかに人工のあとが見られる。

将監は周囲を関領にとり囲まれた中で、下条方の最前戦の重要な役割を負うて千木に住した。将監の父帯刀は古城をまかされた人であるが、祖父は近江国佐々木六角大膳太夫高頼で、帯刀は高頼が深志城に逗留したときにできた子で、康氏が下条に迎えられるときに付添ってきた。帯刀は康氏にとっては母方の伯父にあたる。

たときに、家臣になったとする説もあるが、関氏が伊勢の国から流れてきたとき、供をしてきたのが先祖で、初め新野に住し、その後小野に移ったとするのが定説である。忠動にはげみ、関伝記にしばしば登場する。矢草城より小野に城を移すよう進言したのも伊予であった。

領主の高慢な振る舞いに老臣・宿将の心が離れ、領民の苦しむのを見て、度々諫言し、下条氏と和平を結ぶことに懸命になるが、かえって国盛の怒りをかい、国盛のために討たれようとする気配を察して下条氏に内通した。関氏滅亡の大きな役割をになったのである。その行動には同情的な見方が多い。

天文13年に関氏滅亡後、伊予は小野の所領を安堵され、下条百騎の中に数えられた。屋敷は小野日比原にあったが、水害のために移住し、今は屋敷あと近くに供養塔が立っている。屋敷あとは水田になっているが、水田をつくる時多数の陶器片が出たといわれ、つい最近も畦地から中世陶器片が見つかっている。

天正16年坂巻長玄（善右衛門）の創建による正法寺、曹洞宗・虚空蔵菩薩を本尊とする。大下条の大部分は正法寺の檀家である。



正法寺境内にある観音堂別名水月堂とも言われ、十一面観世音菩薩を本尊とする。創建は正法寺より古く、永祿の頃とみられ、大下条八景の一つに数えられる。



千木・佐々木家累代の墓 佐々木将監を祖とする



「下条記」の著者、佐々木喜庵の墓
将監から数えて6代目、近在の大庄屋をつとめた

将監は千木佐々木の祖となるが、二代目は坂場（愛知県豊根村）村松氏から養子に入った佐々木出羽である。出羽は深見板巻と同じく、和知野城夜襲のとき討手の大将となり、戦功によって、松島・長沼を給わり下条百騎の一人となっている。佐々木家六代を継いだのが、下条記の著者、喜庵である。

関 大隅 三代盛経の弟で、関氏最後の城主国盛には叔父にあたり、御供に館を構えていた。国盛の不行跡にしばしば諫言したが用いられず、次第に遠ざかって引籠りがちだったという。下条氏夜襲のとき急の知らせを受けたが、御供からでは間に合わずとみて、援軍をあきらめ下条方に敵意のないことを早急に通じた。下条氏からはその行い神妙であるとして、御供・中谷の安堵と富草白須を加増された。その後、南島治郎左衛門と改名して御供に土着したといわれる。

仁善寺（新野一廃寺）を修築しており、新野八幡城に在城したこともうかがえる。また下条氏に降りてからは粟野に屋敷を賜わった

とも言われる。居住地については諸説あるが、和知野城落城の際に御供にいたことは確かで、御供には大隅にまつわる由緒も多い。

【城跡】

大下条には関氏の築城による城跡が四つある。早稲田を中心に、とりまくように三つの城跡と、最後の居城となった和知野城である。それぞれについて簡単にふれると、

八幡城跡 早稲田西方の字風越木平の北方山頭に約10aあまりの平坦部があり空堀の跡をとどめている。関氏がこの地方に進出した際に築城を試みたものとみられ、矢草城を築くまでの仮城であったともいわれている。築城年代及び在城期間等についてははっきりしない。近くに関氏の祀れる八幡宮のあととみられる小祠があり、この付近一帯が八幡城といわれている。

矢草城跡 井戸部落字本城にあり、家古沢とも言われている。大永5年(1525)に築城され、上田城に移るまでの11年間をここに居住する。移転後は同族が守った。純然たる山城で、山頂に広い平坦があり、これを



井戸より城山(上田城址)をのぞむ
中央のくぼ地が、から堀になっている。築城後、
わずか二年で和知野に移っている。



早稲田神社の拝殿と神木の大杉
神社の歴史を証明するかのよう樹齢1000
年を越し、周囲約10mの太さに圧倒される

本郭として、その下方に数段の帯曲輪が設けられている。

上田城跡 小野部落の字城山の地にある。城山の山頂丘陵の突端部に構築されている。眼下に深見部落を一望し、天竜川をへだてて、赤石連山を眺めることができる。旧村八景の一つとされた景勝地である。城の構築は単純で、本郭のほか三つの郭があり、東西に二条の空壕がつくられている。天文5年（1536）に築城し、わずか2年で、要害堅固にあらずとして、和知野権現城に移っている。

和知野城 権現城とも呼ばれる。関氏最後の居城で大下条の南境を流れる和知野川の南岸にあり、標高520mの険しい山の頂上、字城山の地にある。和知野川の河岸より急峻な坂を約100m登ると、城平という緩傾斜地があり、これより60m登って城址に達する。城址は北面し、東西は深い溪谷で、後は山つづきとなる。極めて要害の城である。城址の本郭の後方に三基の墓があり盛経夫妻と国盛の墓といわれる。その近くに熊野権現社があり、その裏に空壕がある。この城を権現城というのは、熊野権現を祀ってあるからであろう。天文7年以後の居城であり、天文10年の下条氏の来襲には難なくこれを退ぞけたが、人の心の乱れに内から崩壊した形で、天文13年、下条氏の夜襲にあえなく落城し、滅亡するに至った。

3 早稲田神社と早稲田地籍の古字・古社寺・及び中世遺物出土地について

(1) 早稲田神社について

早稲田神社は式外社（国史現在社）である。平安時代の国史・日本三代実録に貞観15年（872年）5月、正六位上和世田神社が位一階を昇して従五位上に叙された、という記事が載っている。延喜式神名帳に記載された神社を式内社といい、神名帳に記載はないが、続日本紀以下の国史に見える神社を式外社、又は国史現在社という。伊那地方には式内社として阿智神社（阿智村）と大山田神社（下条村）、式外社として早稲田神社の三社が知られている。地域の広い伊那地方に式内社・式外社が合わせて三社だけということ、しかも南部山間地のみに片寄っているのはどうしてであろうか。阿南地方は第三紀層で地味が肥え、温暖で水田耕作に古くから適していたというだけでは説明できないものがあるが、しかし早稲田神社が平安時代に中央政府に認められるほどの神社であったことは間違いないところである。

早稲田神社は下伊那郡阿南町西条の字三島山208番地に鎮座する。拝殿の南側に神木の杉があるが、目通りで周囲約10m、樹齡は千年を越しているといわれ、威厳をもってそびえている。また、拝殿の北側には柵樹が植えられているが、これも太さ約2m、千余年を経過した古木とみられ、神社の古さをうかがわせる。

早稲田神社の創立は、前述の貞観15年より以前であることは明らかであるが、社伝によると、それより23年前の仁寿元年（851年）としてある。神祇官から位を授けられる程であったから、近郷近在の総鎮守として、崇敬者が多く、かなり盛んであったことは推測に難くない。西部神道説の流行した時代であるから、神宮寺があったことも当然考えられ、鶴口など神宮寺につながる



早稲田神社社宝の鐃口
 県宝に指定され、鎌倉期のもの、岩倉寺
 八王寺宮とあり、岩倉寺は早稲田神社の
 神宮寺とみられている。



木彫薬師如来立像
 観音堂内の中央に安置されている、痛み
 はひどいが鎌倉時代のもつとされ、神宮
 寺の本尊であったとも言われている。



小野・上田城趾北麓の向上観音堂の内部 中央に薬師如来立像を安置する。この観音堂
 は、かつては早稲田神社境内にあり、一時宇・大日に移され、その後現地に移された。

遺物も残っているが、その位置の推定などについてはあとの古字のところでふれることにしたい。

三代実録では和世田神社とされているが、古米・早田・和勢田などいろいろな字があてられていたようで、文化7年に神祇管領の吉田家へ社号の允許を出願したときに「早稲田神社」として統一し、以後早稲田神社として今日まできている。

遺物としてはつぎに挙げられるものなどが残されている。

① 罎 口

鎌倉時代に鑄造された郡下最古の罎口で、県宝に指定されている。径20.1cm、陰刻の銘文に「岩齋寺 八王子宮、正応3年5月23日」とある。社伝によると、岩齋寺は早稲田神社の神宮寺で、同寺内の鎮守八王子宮に懸けてあったものとされている。神社境内に最近まで末社として、八王子宮の小社があった。

② 木彫薬師如来立像

境内にあった薬師堂の本尊である。神宮寺の本尊であったともいわれる。高さ71.6cm、檢造りであるが、いたみがひどく、腐蝕している。奈良美術院主事新納忠之介先生は鎌倉時代のものと鑑定された。この薬師像は現在、小野の上田城址北麓の向上観音堂内に移されている。

③ 古 銭

昭和9年、神社裏手、現国道の上の畑より素焼のつぼに収めた古銭一万一千余枚を発掘した。畑は現在は私有地となっているが、もともと神社域にあったもので、この古銭は容器と共に、早稲田神社の宝物となっている。万年通宝一文をのぞいては全て支那銭であったが、

永楽銭が一文も入っておらず、そのことは埋蔵年代が永楽以前つまり、室町期より前であることを示すものである。

これらのものから推しても、早稲田神社は平安から鎌倉時代にかけて地方屈指の歴史を持つ神社であったことを知ることができる。

室町時代に入って、この地を支配した関氏・下条氏も共に早稲田神社を崇敬したことが神社記録に残っている。関氏は早稲田神社を領内関郷の産土神として信奉し、春秋の祭礼には、御供村よりの御供米・供物を神饌とし、御手洗い井は井戸村にあり、造営の用材は千木村より伐り出し、池の島より川



昭和9年に神社の裏山より発見された古銭と素焼の古つぼ神社の社宝となっている。埋蔵は室町期以前とみられる。

魚を献上し、田上村は斎田のあったところで、平久は神饌を盛る瓶を奉り、神子谷の少女は巫子となって神事を勤めたと伝えられる。これらのことからその祭祀がいかに盛大であったかを知ることができる。これらの村々は現在も大下条地区の部落名として残っている。関氏を滅して、この地を領有した下条氏も、神社を崇敬することにおいては関氏とかわることはなかった。皇典講究所の神祇全書には、早稲田神社は往古下条22ヶ村にて祭祀を司り、神饌を供進した、と記載されている。

江戸時代になると早稲田神社には朱印地がなく、専属の社家もなく、最寄りの神職を頼んで神事をとり行う状態となり、あまり社運振わず、順次衰えていった。

(2) 早稲田地籍の古字、城跡・古社寺と中世遺物出土地

① 古字に見える早稲田地籍の様子

付図の古字図は早稲田地籍のうち、早稲田神社とその周辺、及び国道151号線ぞいに発達した街並をはじめ、部落の主要部のほとんどが含まれている。このほかに「大日峠」に南面する斜面に集落が一部と、西側に半僧山、弁当山など下条山脈に連なる山地が広がっている。古字図に示された区域はこの山地の東山麓に形成された扇状台地にあたる場所である。「一里塚」より南西は「入坂」あたりから南沢による扇状地形をなすが、北はほぼ151号線を境に東面して、ゆるやかな傾斜となる。山麓から台地端まで、ざっと450mの帯状傾斜面がこの部落の主たる生活地域をなしている。部落の北側は井戸沢を境に井戸部落と接し、南東は南沢を経て小野部落と対面している。いずれの沢も東に流れて千木沢に合流し、千木沢の東には「深見の池」で知られる深見部落がある。

古字図作製はこの地域広範に中世遺物の出土が予想されるため、出土地を図表に正確に記す必要があること、式外社として古い歴史を持つ早稲田神社なので、遺物と古字の関連から、太古の神社存在の様子を探ることができるかも知れないという期待からであるが、以下、現在の調査時点で古字図から読みとれるものをひろいあげてみると、

ア) 早稲田神社周辺の古字と摂社、末社について

早稲田神社の社域は「三島山」である。かつての祭神「三島大明神」とつながるものであろう。神社の裏山には「宮後」、前方には「宮下」「宮ノ前」、南側に「宮脇」と周囲に神社と結びつく字名がみられる。神社前の「日カゲ」のあたりは「神田」ともいわれ、「道下」あたりから東南にかけての「古市場」ともいわれていた。門前市が開かれたのはここあたりであろうか。

摂社、末社についてはかなり多かったことが知られている。その主なものとして、下伊那史にあげられたものに、大山祇社（字風越木＝「入坂」の西山地）、天伯社（字寺尾）、富士浅間大神（字大日山）、熊野三社（字権現森）、金山彦（字久保畑）、若宮八幡宮（字モチ屋畑）、天照皇大社（字社久地）、おくわ様（字三島山）などがあり、これらは明治末にことごとく本社に合祀されている。

イ) 古寺の推定にかかわる古字



字・門前・坊主畑より早稲田神社の森をのぞむ
字名、出土遺物からみて、神宮寺の推定地として最も有力
視される位置から神社の森をうかがった。

早稲田部落には寺は現存しないが、神社に鎌倉時代の鰐口が残されており、それに「岩審寺」の銘文がきざまれている。早稲田神社の神宮寺ではないかと推測されているが、その寺跡を推定する手がかりとなる字名として北に「寺尾」「寺カイト」があり、「権現森」の中に「寺の池」と通称されるところがあり、さらに「権現森」の南

に「坊主畑」「門前」などがある。この中で「坊主畑」「門前」からは、平安から中世にかけての陶器片や古銭が採集されており、市村成人先生もこの地を推定されたが、「寺カイト」にも寺僧のものといわれる墓が残っていて、もう少し有力な手がかりのほしいところである。

ウ) 古字にみえる古い民家の位置

早稲田神社には無形文化財の人形芝居が伝わっている。日下部新一先生の調査報告書「早稲田人形芝居」があるが、これによると、いつ頃より始められたのか定かではないが、天保年間に上演されていたことは確実である。この人形芝居を演ずる役者は、浄るり、三味線、立役、女形とそれぞれ家筋によって代々役柄が決まっていたとのことであるが、現在あるいは先代まで受けつがれてきたという家々の位置をほとんどこの古字図にみることができる。つまり、北より「上海」「島」「売屋」「佐野屋」「久保畑」「新屋敷」「林垣外」「紺屋」「一里塚」「泉屋」「桃田」(他に「久保屋」は地名がなく、「横山」は大日神に南面する集落にある)で、いずれも旧道に面しているか、その近くにあり、周囲に「家ノウラ」「家の下」「前田」「前畑」などの字名を持つ、古い家柄の家々である。これらの家並の中に「禰宜屋」という家があるが、この家の墓地在神社域に接して在り、禰宜職であったこと、部落で最も古い家柄とされていることから、古くはこれらの家並が部落の中心であったことは間違いないであろう。これらの旧家が神社東南方の比較的低い段に集まっていること、さらに部落のはずれに多くつけられる「サイの上」が、神社に近いところにあることから、神社は集落のはずれ、北側上段に位置し、従って神宮寺もこれと平行する位置にあったと考えるのが妥当ではないだろうか。

② 早稲田地籍の中世遺物出土地

早稲田地籍の遺物分布調査は6月に1回、8月に2回行った。悉皆調査というものの、人数

時間に制約があって、まだ全域にわたっての調査がすんでいないので、今後、まだ出土地が増えるものと思われる。分布調査の結果については、Ⅲ調査結果の1のところに詳しく記述されているので、ここでは簡単にふれておきたい。

出土地は現在のところ、古字図に数字で示されている14ヶ所で、遺物状況については同図右下の図表を参照されたい。

遺物分布地を大きくまとめると、①早稲田神社周辺（寺尾・三島山・宮後・宮下・森下・上溝街道下・宮ノ前）の一群と、②東に下って「寺カイト」「日カゲ」などの台地先端部、③国道予定地内の「久保畑」、④その上段で神社と等高線上にある「坊主畑」「門前」、⑤さらに南西によって「清水」「桃田」の傾斜面と、5ヶ所にまとめることができる。

このうち、とくに遺物が濃密だったのは「日カゲ」（遺跡番号8）で、相当の傾斜面であるが縄文から中世までを含む複合遺跡である。調査の折は雨あがりという好条件もあったが、多量の採集で、特長あるものを選び出して持ち帰る程だった。東面するこの地が「日カゲ」となっているのも首をかしぐところであるが、地元の人話では上段にこれより日照時間の長い「日ナタ」があり、それに対応してつけられたのではないかとのことである。旧来早稲田遺跡として登録されているのは、この地を指すものと思われる。隣接する「寺カイト」は平坦の桑畑で、寺僧のものといわれる墓が残っており、古寺を探る上で関心の持たれる地であるが、遺物も相当量採集され、同じく縄文から近世のものまで各時代のものが含まれている。

早稲田神社周辺は中世遺物の濃いところで、調査の際、神社に向う道筋で「街道下」に山茶碗の底部、「宮下」で天目茶碗の口縁など、中世のもの数点がみつき、一躍この地の中世遺物に着目させるきっかけとなったところである。

久保畑は平坦な畑地であるが、上下二段に区分される畑地のうち、下段に縄文遺物が多く、上段には須恵・灰軸から中世陶器片が集中している。ここから「日ナタ畑」「ハネ」へかけての一帯は有力な遺跡である。

「坊主畑」「門前」はひと続きの緩傾斜面で、平安期の須恵・灰軸もみついているが、瀬戸・常滑など中世陶器片の多いところである。調査の折、案内してくれた土地所有者が、耕作中によく古銭をひろうと話してくれたが、その話の最中に足元で古銭が見つかった。北前方に「権現森」の水田をはさんで、神社の森が迫り、この地が神宮寺の跡地として有力視されるのも、ここに立ってみるとうなずけるような気がする。

「清水」「桃田」は南沢による扇状地形の同じ傾斜面にある。上方の「清水」からは縄文と弥生の土器片が採集されているが、共通して中世陶器片がみられる。「清水」にあるプールを作る際にかんりの遺物が出たということであるが、今となっては真相はわからない。

以上、分布地の様子に大まかにふれたわけであるが、調査したところからはほとんど遺物が見つからない。調査は畑作地に限られるので、「権現森」「前田」「社久地」など、比較的広い平地の水田地帯からは、遺物は発見されていないが、周囲の状況からみて、これらにも遺跡が予想

される。大胆な言い方をすれば、早稲田全域にわたって、濃淡はあっても分布地であるということが出来るかと思う。

4. 大山田神社旧鎮座地（伝承）と寛文期の深見の池の様子

(1) 大山田神社旧鎮座地山田について

早稲田の隣り部落に、天然湖としては伊那地方最大の「深見の池」（周囲716m）で知られる深見部落があり、深見の内、山田地籍に大山田神社旧鎮座地と推定されるところがある。



大山田神社旧鎮座地とされる山田地籍 ぼつんと残された小屋は現在、深見神社に合祠された山田池明神社の祠られていたあと、神社跡の前には水田がひろがり、須臾器などの遺物がひろえる。



山田から深見部落を望む 下方の水田は耕地整理で大きな田んぼに変わったが、深見の池の湧水を利用する古水田地帯であり、深見七瀬の一つとされる「シダナのふち」もこの一画にあった。

大山田神社は阿智神社と並んで、伊那地方の式内社二座のうちの一つであるが現在の鎮座地は下条村隔卑字宮の腰にある。室町時代下条氏によって造営された重要文化財指定の社殿をはじめ、鎮西の森といわれる杉や松の大木が鬱蒼としげり、盛観をなしている。

しかしながら、この大山田神社は、種々の記録からみて、最初からこの地にあったものでないことが明らかとなっている。慶安2年（1649年）に家光から鎮西八幡宮領として、10石の朱印地を給わっているが、このときの本宮は八幡社、摂社は諏訪明神であり、大山田神はまだ祭られていなかった。神主家鎮西氏によって神祇管領吉田家に願い出されて、大山田神社として承認されたのは元文6年（1741年）のことである。鎌倉以後、久しく人々の記憶か

ら遠ざかっていた大山田神社は吉田家の承認を得ることによって、鎮西野に復活したのであった。

では大山田神社の最初の鎮座はどこだったのかということになるが、諸説ある中で、最も有力なのが、この深見山田説である。

山田は深見本部落からは離れており、千木沢溪谷をはさんで相対した位置にあるが、もともとは山田の方が本村であったとも言われる。うしろ南側に山を負い、前面は北に傾斜してはいるが肥沃な水田の多いところである。あたりには山田という屋号の、かつて神主家にあたる旧家が一軒だけみえる。

ここには最近まで古池大明神社があったが、現在、祭神は深見諏訪社に合祀され、物置となった拜殿に絵馬が残り、周囲の景観が往時をしのばせるだけである。山田古池大明神社がいつごろからあったかは不明であるが、慶長年間に存在していたことは旧記によって知ることができ、室町時代と推定される獅子頭も残っている。神社所在地が山田であり、祭神が大國主命であることから、ここを大山田神社の古地にあてようとするのである。古老の話では、山田池明神にあった大山田神社の古記録類は、故あって鎮西の神主家に譲られ、その後、大山田神社が式内社として鎮西に移し祭られたものだと言っている。

明治初年につきのような大山田神社の自家争いがあったことが知られている。明治2年、太政官により、延喜式神名帳記載の諸国大小の神社は勿論のこと、廃絶したものについても詳細にとり調べ神祇官に届けるように通達があった。深見村神主・松沢左近は、自分の奉仕する山田古池大明神は、もと湖水（深見の池）より三町上の森の中に、大山田神社と号し、建御名方命を祀る諏訪神社と相並んで崇敬していたが、何時の頃よりか今のところへ遷し祭った。それより地名を山田と呼ぶことになった。従って式内社大山田神は現在の古池大明神より外にない筈、と竹佐役所へ出願した。当然、元文年間に吉田家の承認を得ている鎮西大山田神社と懸り合いになり、双方共にこれを証拠だてる資料に欠き、いずれとも決定

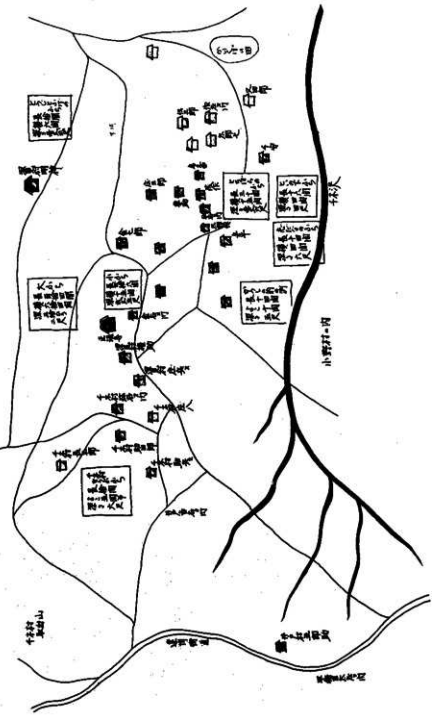
することができなかった。ところが、改めて神祇官に訴え出ることになると莫大な費用を要するので、仲人が入り、鎮西側より深見の左近に酒料として、金拾五両を差し出し、左近が願い下げをすることで妥結したといういきさつがある。

結局、式内社大山田神社は鎮西鎮座で落ちついたのである。



深見の池 周囲716mの伊那地方最大の天然湖、温水貯め池の役を果たし、古来より周囲の田は反当収量の多いことで知られる。池の右上手に大下条小学校があり、その裏にみえる山が城山（上田城跡）、山田は写真左手奥の山の手に一軒はなれてみえるあたり。

深見 千木村図 (寛文年間)
1745-1752



千木・深見村図 (年代不詳)

千木・佐々木家に伝わる古図をもとに書き直したもの (写・松沢)

池山田というのは深見全域をさし、池山田の池という地名はそこに豊富な湧水、水溜りがあったことを意味するから、それはとりもおさず深見の池をさすものであり、この地域には湧水灌漑の古水田地帯で早くから開けていたのであるから、池山田神社は一時は相当に盛大であったことが推測できる。最近、この山田を考古学的に見直してみたいと調査してみたところ、水田の土堤で、山茶碗底部が採集され、この地の古くは神主家であった松沢享氏が水田耕作中や屋敷の周辺で発見した遺物が保管されていて、その中に須恵器片・山茶碗片・天目碗片・瀬戸系陶器などが多数含まれていた。このことからみても、この地がただならぬところであったことがわかる。

(2) 寛文期の深見の池の様子

深見とは深海、又は深水の転化したものであろうといわれる。何れにしても深き渚水に起因することはいうまでもない。現在の深見の池は寛文10年の地震による大地殻変動によってできたものであるが、その時の大変動の様子を伝えるエピソードとして、天竜川対岸の我科にあった桜の古木は、池端にあったのが押し出されていったものという言い伝えがある程である。もともとこの地は地すべりの起こりやすいところだった。

このときの大変動によって、七つの淵ができたといわれ、一口に「深見七淵」といわれているが、現在に残るのは「深見の池」と呼ばれる大淵のみである。(土地の人はフチと呼んでいる)あとの淵は、2、3を除いて面影は勿論、位置すら不確かになっているが、当時の様子を伝える古地図が、千木・佐々木家に残っており、作成年代不明(寛文年間と推定)であるが、深見七淵のようすをうかがい知ることができる。図は古図を書き直したものであるが、これによると淵はつぎのようである。

| | | | |
|-----------|--------|-------|-----------|
| 大ふち | 長 114間 | 横 64間 | 深さ 30ひろ2尺 |
| 小ふち | 長 26間 | 横 15間 | 深さ 2丈 5尺 |
| セウブぶち | 長 10間 | 横 5間 | 深さ 6尺 |
| かうしの前のふち | 長 14間 | 横 10間 | 深さ 5尺 |
| 志だなのふち | 長 14間 | 横 4間 | 深さ 6尺 |
| とうじとうげのふち | 長 10間 | 横 6間 | 深さ 1丈 2尺 |
| とちぼらのふち | 長 30間 | 横 15間 | 深さ 1丈 9尺 |
| といの下ふち | 長 16間 | 横 4間 | 深さ 4尺 |

大淵を入れると八淵になってしまうが、数え方に違いがあるのだろうか。大淵の大きさは現在とそれほど変わらないが、深さは現在では最深9mであるのに対し、30ひろ(40～50m)もあったことに驚かされる。

これらの淵を古字図・古老の話などで照合していくと、大淵より北東上段に「とうじとうげのふち」(字トウジ)があり、西南上段に「セウブぶち」(字セウブ池)がある。あとは東南方天竜川に向かって、深見の池の湧水を利用する水田地帯に集中している。大淵に隣接して「小ふち」(字ヒエヌマ)、その下方に「とちぼらのふち」(字トチボラ)・「志だなのふち」(字シダナ)があ

る。この「志だなのふち」の東側に「といの下ふち」、西側に「かうしの前のふち」があるが、この二つについては位置がはっきりしない。これらはふち田とも呼ばれ、いずれも地ぎょうの深い沼田であった。ごく最近になって「志だなのふち」は改良工事で様相を一変し、「セウブぶち」は埋め立てられて、役場の庁舎となり、小ふちも道路の拡張ですっかり小さな水田と変わってしまった。

寛文期の地殻変動以前の深見の池にまつわる伝説としては、天正15年に下条氏が没落した際、家老の下条志摩一族は討手に追われ、逃走中に自害するが、それを聞いた志摩の老母が、深見の淵に身を投げたという話が残っている。妙令の美姫が尋ね来て、蛇となり入水すると、にわかには晴天かき曇り、猛然と雷雨が起って、たちまちにして大淵となったという伝説ともつながるものであろう。地殻変動以前の深見の池については、小さな淵だったといわれるだけで、その実相を知ることはできないが、このことからある程度の大きさをもつ湧水池であったことはわかる。

大変動で七瀬が生じたように、この地は古代から湧水の多いところであり、大山田神社が早稲田神社同様に田の神・農業神であったことを考えると、かなり早くからこの地に水田が開かれていたとみることができる。当然弥生時代の遺跡があってよいはずであるが、今のところ先年池端の字ハネで弥生土器片一片を拾ったのみである。地殻変動で遺跡がこわされてしまったのであろうか。

地殻変動の際、深見一帯の様相はかなり変わったと思われるが、池の端東南方一帯（字フチバタ字イケのハタ）からは、中世の須恵器片・灰釉片・山茶碗片、などの他、近世陶器が多量に採集



深見の池に埋没したために現在地に移されたと言われる深見神社 今では池山田明神も合祀する。右側の石柱に紙園祭・賦無形文化財指定の文字がみえる。



深見の祭り 例年7月24日が宵祭り、戦時中でも花火を絶やしたことがなかった。池に筏を浮かべて神事を行う。池に花火が映え、筏から笛や太鼓の音がひびいて、夏の夜に風情をかもす。県無形文化財の指定を受けている。

されている。池の北方一帯は日向きもよく、やや急斜面ながら居住地に適する所であるが、ほとんど遺物はみつかっていない。地殻変動で北側の池端にあったお宮が池に埋没してしまい、附近に字スワノミヤの地名を残しているが、北側の方が変動が大きかったのであろう。

諏訪神社は深見の池より北方上約300mの山腹に移され、夏の例祭には、深見の池に筏を浮かべて神事を行い、池端から打ち上げる花火が四方にこだまし、水に写る。県無形文化財に指定され、深見の祭りとして近在に知られている。 (松 沢)

- 参考文献 下伊那郡史 4巻、5巻、6巻
伊那史料叢書(四)
関伝記
下条記
大下条村誌



第3圖 早稲田遺跡周圍地形圖

Ⅲ 調査の結果

1. 調査結果の概要

久保畑・ハネ地籍の三年次に互る発掘調査によって、中世陶器・平安時代・古墳時代・弥生時代後期・縄文時代晩期・同後期・同中期・同前期・同早期の各時代に互る遺物が出土している。量的に多いのは弥生時代後期・縄文時代晩期・同中期・同早期の遺物で、とくに縄文時代晩期・早期の土器出土が多いことが注目される。遺物出土が多いのに住居址の検出がなかったことも特長のひとつである。その代わりに弥生時代後期・縄文時代晩期・縄文時代中期の土壌やく104基がほぼ同一の場所にやや所を変えてそれぞれの土壌群が構築されている。この土壌群の下には雄大な溝址2が検出されている。別の云い方をすれば幅の広い深い溝址の堆積層の上に土壌群が存在することになる。他の土壌は近世以降と思われるものが1基、中世が2基、縄文時代が1基散在して検出されている。

溝址はB地区北側に1（縄文時代中期）、C地区に1（縄文時代晩期）検出され、その外の中世以降の石組遺構3基、近世遺構の道路址・堅穴址が検出されている。

2. 土壌群（第5・6・7・8・9・17図・写図3～11）

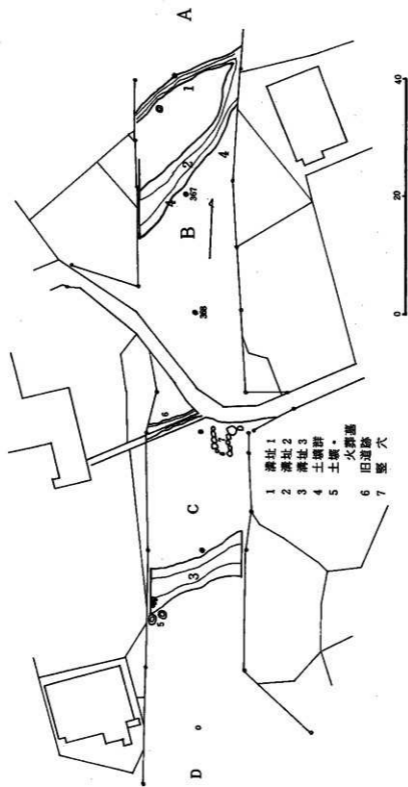
検出された土壌はB地区で105基、C地区で3基の合計108である。そのうちB地区北側の102土壌は近世以降、C地区の溝址3の縁で検出された土壌は縄文時代晩期・中世のものである。天目茶碗伴出の土壌106、石積を持つ土壌107は火葬墓かと思われる。

B地区の土壌群は、後に説明する溝址2の堆積面を中心にして溝の方向に沿って帯状に並んで検出された。表土はほぼ平坦になってはいるが、西から東へ、南から北へ傾斜する地形の中で、黒色土の堆積はほぼ平坦・下部黄褐色土は碗状の堆積となり、いわゆる久保畑の地籍名を象徴するかのよう窪地があったものと思われ、その窪地に土壌群が立地している。

黒色土をはがすと多くの土壌・ピットの存在が確認され、弥生時代後期・前期的な土器、縄文時代後・晩期の土器が発見された。土壌を掘り下げると茶褐色土・黄褐色土の堆積が厚く、下層からは縄文時代中期の遺物が多く出土する状態で、上から部分的に掘り下げると境底を確かめることが困難となり、時期判定が難しいものが多かった。集意的に出た遺物の時期・焼土等のあり方・周辺からの出土遺物の状態から時期を推量したものが次である。

(1) 弥生時代の土壌（第7図）

石組1はM9を中心にして検出され、上層褐色土中に構築されたもので、長さ2.5m・幅1.



第4圖 久保畑地籍遺構配置圖

2 m の長方形の石囲いである。伴出された遺物はないが検出土層・形態から見て中世以降のものと思われる。この石組の下層には、土壌52・53・63・71が重複し、土壌53からは縄文時代晩期の耳栓（第12図4）と土器が出土している。石組2は近世のものと思われる。

土壌12・13・26・32は出土遺物から弥生時代後期のものと思われる。76・89も弥生時代の遺物が多いが確定しがたい。とくに89の西側一帯では弥生時代後期の遺物が相当量出土し、焼土も検出したが、遺構の確認はできなかった。土壌5は大きな土壌で、黒色土の堆積が厚く上面から弥生時代前期的な土器が出土している。

（2）縄文時代晩期の土壌（第6・8・10・11図）

第8図で見られるように縄文時代晩期のものと思われるものは、5・11・15・16・17・18・31・38・40・41・42・44・45・46・47・53・54・55・56・57・58・59・60・62・67・68・71・78・80・81・82・83・85・86・87・94・96の37基が数えられるが、さらにその数は増えるかもしれない。

特徴的なものを上げると、5は水神平系の土器片も含まれ、大形の土壌で縄文時代中期の土壌7・10・22と重複している。焼土を持つものは土壌16・18・58・83で遺物出土は多い。16・18は焼土群で周囲に小ピットを持ち、黒色土の堆積も厚いから窪穴状の集団かもしれない。土壌58は第5図土層断面A'・B'で見られるように黒色土中の焼土で、大きめな土壌の上面にある。土壌83は50cm以上の筒形の土壌で、上面に配石を持ち石の下に炭・焼土塊があって晩期の土器片40点ほど出土している。全体的には焼土16・18・58を中心にして、溝2の窪地の西南側に集中している。土壌80から北側一帯でも傾斜面に沿って縄文時代後期・晩期の土器片が多く出土しているので、確認されていないがこの時期の遺構があるものと予想される。

（3）縄文時代後期・中期の土壌（6・9・11図）

第9図で見られるように縄文時代後期・中期の土壌と思われるものは、1・3・4・6・7・8・9・10・14・20・21・22・23・24・27・28・29・33・34・39・43・48・49・50・52・61・64・65・66・68・69・70・72・73・74・75・77・79・84・88・90・92・92・93・95・97・98・100・101・103・104・105の52基としている。時期不詳のものも多く、縄文時代晩期と推定したものの中で中期に入るものもあると思われる。

後期の土器片が多く見られたものは土壌6・14・57・58である。また中期の土器・土器片が多く出土したものは、土壌1・7・10・11・17・22・23・27・33・49・52・54・56・59・60・65・66・71・73・74・78・81・83・85・88・89・90・91・99・101・105等であるが、とくに土壌98では深鉢形土器（第12図1）が出土し、99は土壌16（焼土群）の下層で検出された土壌で、3個体ほどの縄文時代中期の土器が出土している。土壌101の周辺は中期の土器片が非常

に多く、40～50ほど集中して出土している。土壌95は下部黄褐色土中に構築された土壌で、土層的にみると下部土層中の唯一の土壌である。先にも述べたようにひとつの土壌を掘り下げていっても、堆積層が厚いところでは上層と下層と土器の時代差が多く違い、土壌として良いかどうか疑わしいところが多いために、層位別の調査に切り替えたので、土壌の分類には自信の持ち難いところもある。

縄文時代中期の土壌・土器片集中地は、溝址2の堆積層の上で溝址の南側縁に近いところに集中している。縄文時代晩期の土壌群と比べてみると溝に沿って広く広がり、遺物出土の多いところは西南側と東北側に多く、それぞれ用地外に掛けて集中地が広がるように思われる。とくに東側用地境は東南に傾斜する地形で堆積層も厚く、茶褐色土・黄褐色土・下部黒褐色土中の多くの土器片が包含され、その厚さは60cmに及ぶところもある。

2. 溝址

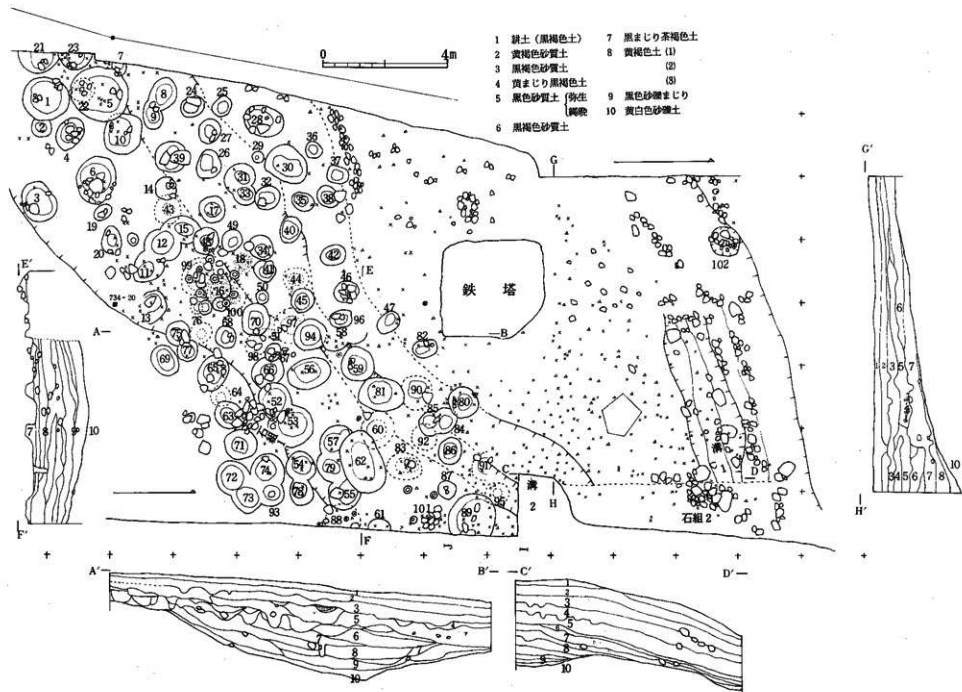
(1) 溝址1 (第5・13図)

溝址1はB地区北側台地先端に近い位置F列あたりを地形傾斜に沿って南西から北東方向に続く溝址である。北側は台地先端部がやや高く南へ落ち込む状態で、F10では最も深い状態が検出された。溝の幅は検出面で80～90cm、深さは60cmほどある。I列まで8mほどの範囲は東北に傾斜する地形で黒色土の堆積が東側ほど深く、その下層に転石が非常に多いところであった。この転石をはずすと溝が現れたもので、北側溝縁に並ぶ転石列から計ると、幅1.5m・深さ1.5mほどに及ぶ溝と思われる。東側下方F7あたりは転石の堆積がおびただしく、その隙間から縄文時代中期の土器・石器が多く見つかると、その隙をはずすと溝址2の砂礫層が見られるので、E6あたりで交差していることが窺われる。遺物の出土状況・溝址2との交差関係から縄文時代中期以降の溝址と推定される。

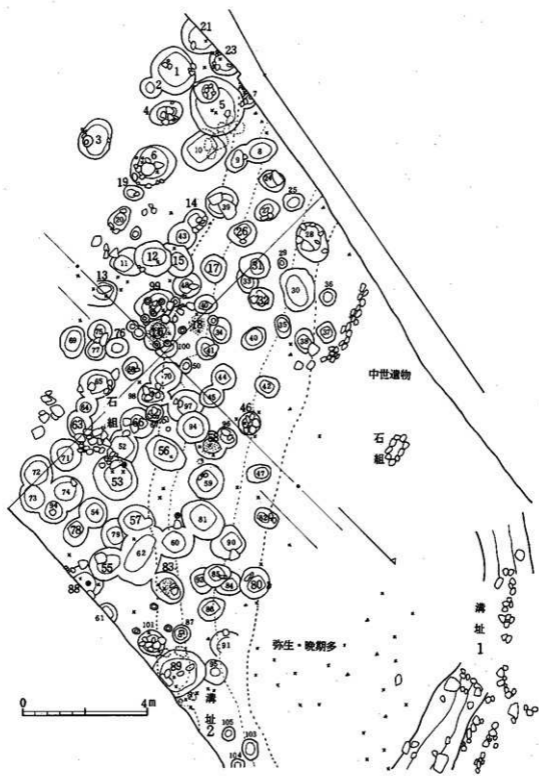
(2) 溝址2 (第5・13・14・15・16図・写図13～19)

溝址2はB地区O・N・M14からH・G・F6へかけて西南から東北方向へ続く大きな溝址である。下層で検出されたところで幅は5.6mから6.2mを計り、深さは西側土層断面では表土下3.2mを計る雄大な溝である。茶褐色土の堆積面まで広げると6m～8mに及ぶ大きさとなる。前述のように、この堆積層の上層には弥生時代・縄文時代晩中期の土壌群が100基以上存在していた。

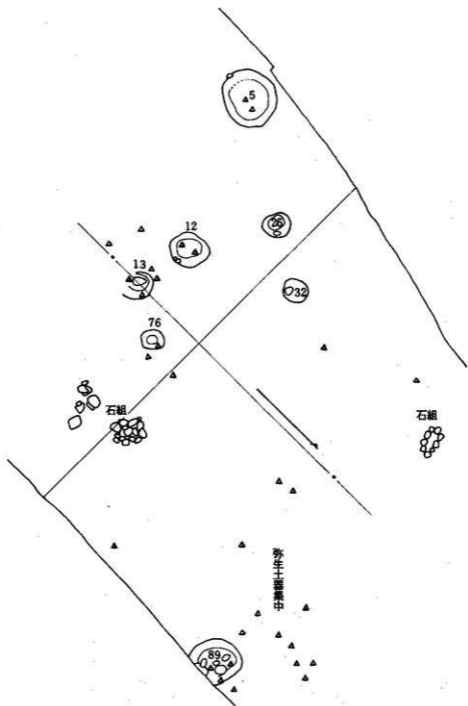
土層堆積を東側D6地籍(第13図C'・D')で表土から観察すると、11層以上に複雑に堆積する土層が見られ、3の黒まじり黄褐色土は中世、5の黒色砂質土は弥生時代・縄文時代晩期、7の黄褐色・8の茶褐色土(黄1・2・3)は縄文時代後中期、9・10の黒褐色粘質土・黄白



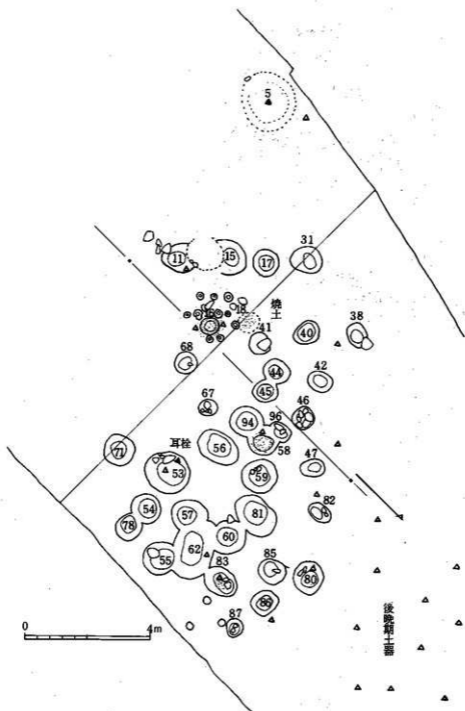
第5図 久保郷地縄B地区上層の遺構図



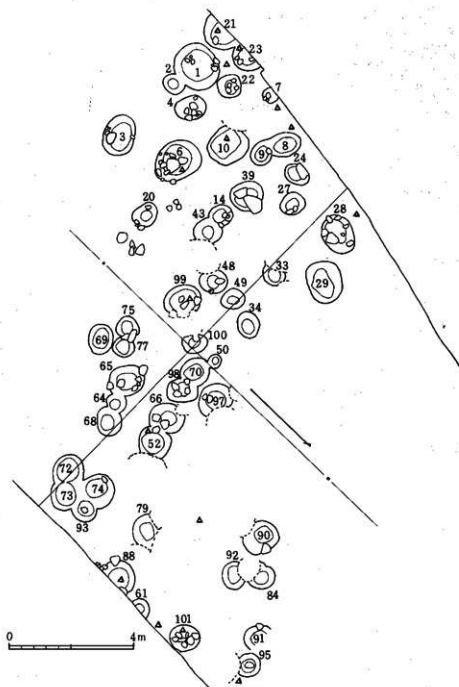
第6圖 久保畑地籍土壤群全体圖



第7図 中世・弥生時代の土壊群全体図



第8図 縄文時代晩期の土壌群



第9図 縄文時代後期・中期の土坑群

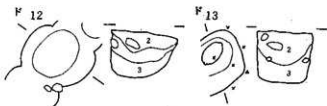
石組1



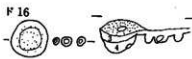
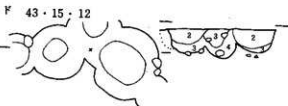
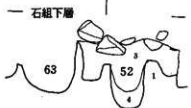
- 1 褐色土
- 2 黑色土
- 3 黑褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 下部黑褐色土



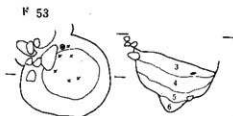
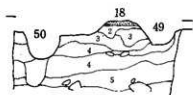
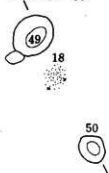
石組下



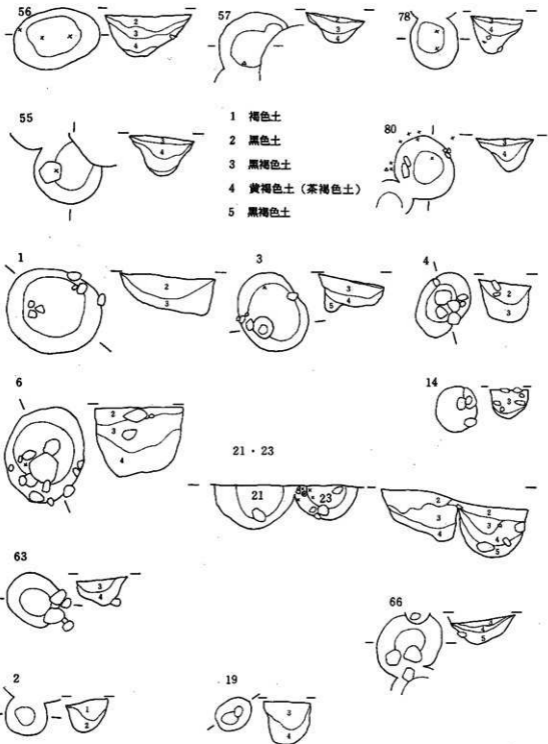
石組下層



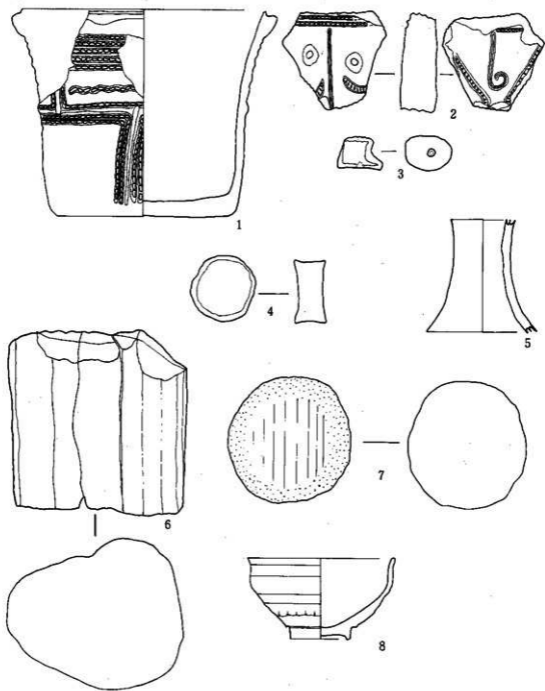
F 49 · 18 · 50



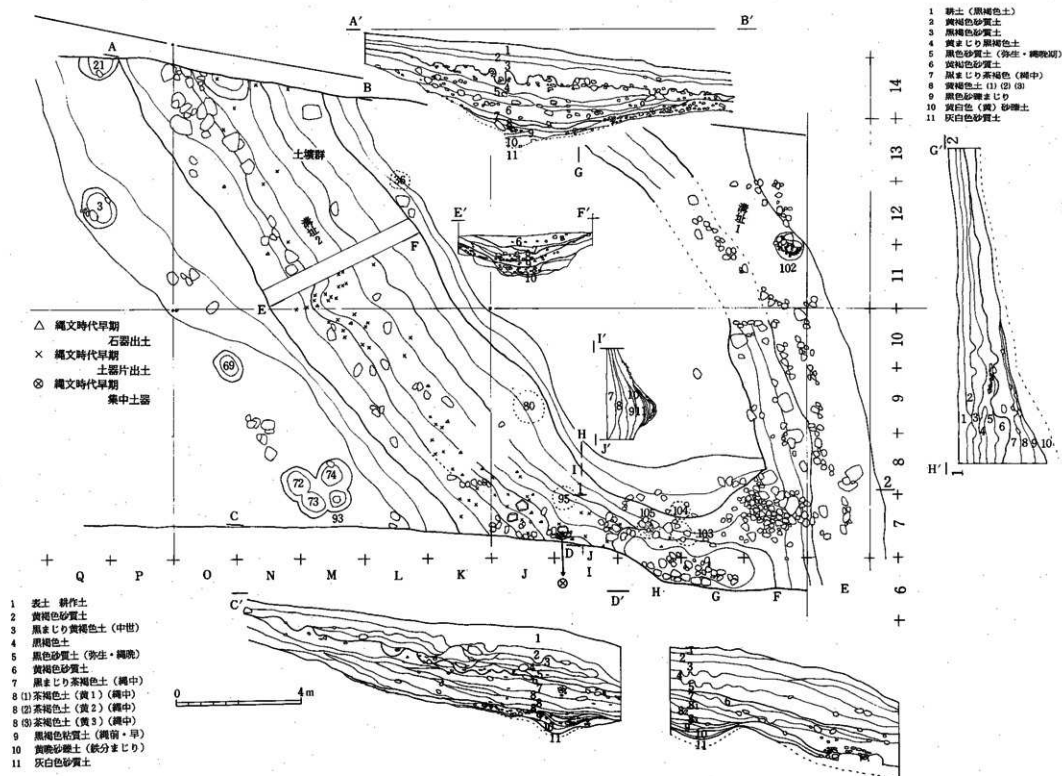
第10図 石組、弥生・縄文時代晩期の土壌 (1:60)



第11図 縄文時代晩・後・中期の土壌 (1 : 60)



第12圖 深鉢・土偶・耳栓・壺口緣・石棒・天日茶碗 (1:3)



第13図 溝址1、溝址2

色砂質土は縄文時代前・早期の包含層と推量している。

溝址の下層を見ると周囲からの転石の落ち込みがみられ、とくに西側南縁が顕著である。(写14) この転石を境にして縄文時代早期の土器・石器が発見されている。第13図の△印は石器・×印は土器片・⊕印は集中出土を示している。第14図の1・2、12・23・24は表裏条痕を施した口縁部である。4は表裏条痕を施した変形土器で、東側D6の最下層から一括出土した土器で(⊕印)この周辺からは多くの土器片・石器片が集中出土し、アンビル状の平石の配置も見られ、一種の生活址の所在が推量される。24はM10で出土した波状口縁のような器形が想像される土器片で、頸部に小穴を穿ったもので、条痕文を地文として押引列文が三段に施文され、裏面にも同様の施文が見られる。この土器片の周辺にも多くの土器片が集中していた。27～30は西側土層断面調査部際で出土し、表面は赤く胎土は黒灰色の繊維土器で、突刺円弧を施した土器片で、29・30は波状口縁の一部が残されている。出土した土器片は大小あわせて100点ほどに及び、中には前期的な薄手無文のものもあるが、大部分は繊維を含む条痕系の土器片である。時期のことははっきりしないが、縄文時代早期茅山系の土器が主体かと思われる。

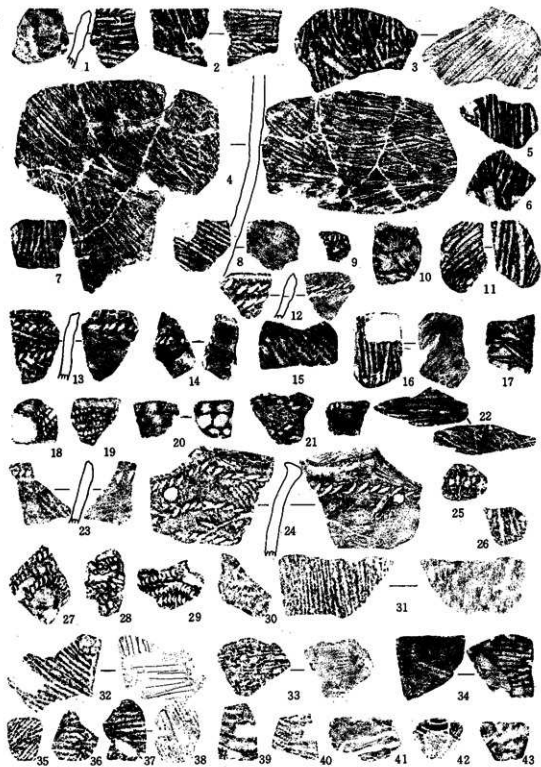
第15・16図は溝址2またはその上層から出土した石器である。第15図1・2はK8辺りの黄白色砂質土中で検出された大形な石器で、珪岩製のものである。3は珪岩製の石匙、4～9は剥離面・調整面の顕著な石器または石材で、10～14は珪岩製の敲打点・剥離面の見られるもの、16～第16図8までは剥離・調整が良く見られる石器で、16は蛋白石、18は青色チャート製、他はいろいろな珪岩製のものである。第16図12・13は硬砂岩製磨石、15～17は剥離面の多い石材で、この類のものは多く出土している。

溝址2は縄文時代早期の時代には大きな流路であったものが、長い間に埋まってその上に堆積したところに、弥生時代後期・縄文時代晩期・縄文時代後期・縄文時代中期の土壌群が構築されたものと思われる。この溝址は西側はどこまで続くのか、また北東側はどこまで続くのかははっきりしないが、北東側は低地に流れ落ちる位置までは続いていることが確認されている。

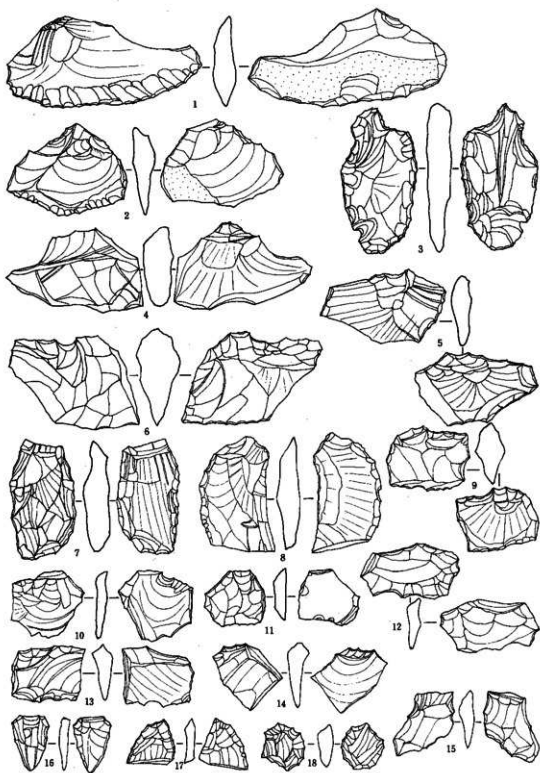
(3) 溝址3 (第17・34・43図・写図20・21)

溝址3はC地区U列から東側へ掛けて地形傾斜に沿って検出された溝である。溝幅は狭いところで4m、広いところでは5mに及び、深さも西側土層断面調査部では表土下3mほどの大きな溝址である。土層堆積をみると上層から黒褐色土の堆積が厚く、中層5・6の黒色砂質土から黒混じり茶褐色土にかけて縄文時代晩期の包含層があり、ところによっては8・9の黒混じり・砂混じりの茶褐色土から縄文時代晩期・中期の土器が発見されることから、縄文時代晩期以降の溝址かと推量される。溝址の上面には中世天目茶碗・陶器片を伴出する土壌(あるいは火葬墓)106・107があり、土層断面中茶褐色土層に切り込んだ焼土を持つ縄文時代晩期の土壌(108)が検出されているので、縄文時代晩期以降の溝址と推量される。

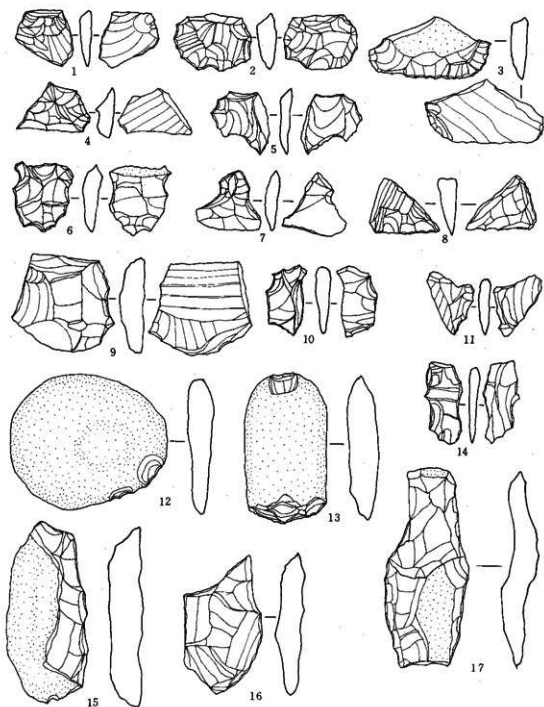
溝址覆土またはC地区周辺から出土した土器片・石器は、第34・42・43図のもので、第34図



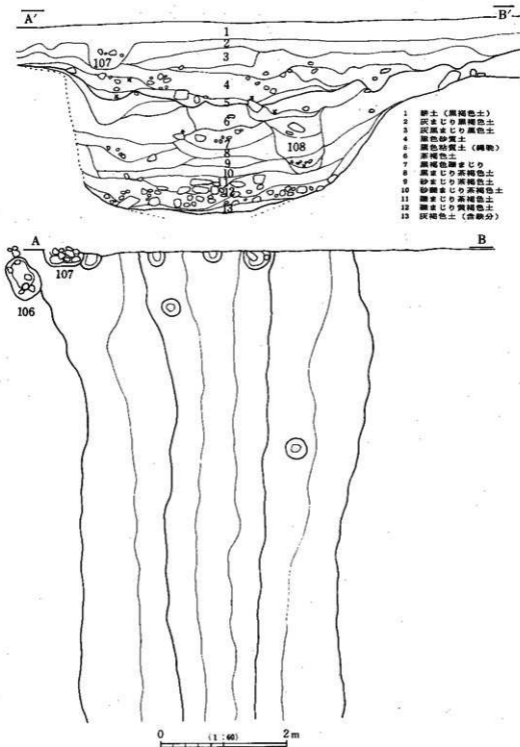
第14回 溝址2出土の縄文時代早期土器(1:3)



第15図 溝址2出土の石器(1) (1:2)



第16図 溝址2出土の石器(2) (1:2)



第17図 C地区溝址3と土壌

30～48は縄文時代中期の土器片、1～32は縄文時代晩期の土器片である。1～4は押圧突帯を持つ壺王式系の口縁、5～10は無文・沈線施文・押圧突帯付の口縁で、11～29は条痕文系の土器片である。石器の出土も多く、第42・43図に示したように30点以上出土している。硬砂岩製のものが大部分で、大形打石器・小形打石器・横刃形石器、黒曜石製ポイント等が出土している。晩期特有の扁平な石器は見当たらないが、青黒の硬砂岩製の石器が多いのが特長かと思われる。溝址全体を溝底まで掘りあげてないので、遺物出土の集中地ははっきり捕まえてはいないが、石器で見た限りでは溝址全体から出土し、土器片の出土は西側に掛けて多いことが分っている。土地の傾斜状況もあるが、西側ほど堆積層が厚く西側用地外の緩傾斜地では縄文時代晩期の遺物が採集されることから、溝址の延長・その他の遺構等は西側に多いと思われる。

なお、C地区全体では中近世の陶器片は出土したが、縄文時代晩期・中期の遺物はこの溝址とその周辺に限られているので、B地区の溝址2とその周辺の遺物出土状況と良く類似した傾向を持っている。

3. その他の遺構

(1) 旧道跡 (第4図・写図22)

B地区とC地区の隣りでの現在の旧道に沿って道路址が検出されている。この道路址は現在の旧道に一部かかりながら北側に広がり、幅1.8mほどあった。南側に縁石状に大きな角石がすえられ、道路面と思われるところはやや窪みを持って硬い面が続いている。この硬い面をはがすと小石・瓦破片・礫が敷き詰められている。第2図早稲田地籍古字図にある久保畑南を通る旧道の名残りのひとつと思われる。

(2) 近世以降の竪穴址

旧道跡が現在の道路に交差するやや東側に、石囲い状の石組が発見されている。石組の範囲は南北3m・東西2mほどの範囲を取り囲むように並べられ、黄土で盛られた形跡があり所々に硬い面が検出されている。石組のほかはピット等の痕跡は確認されていない。この石組の東側前面には大石を使った石垣が南北方向の並んでいた。現在でもこの方向の畑の段差があるので、この竪穴址に付随するものかどうか不詳である。

(3) 石組遺構

B地区で紹介した石組遺構1・2のほかに、北側台地端を掘り下げる段階で、表土下1～1.5mほどのところで、平状石や径20～30cmの石による石列状のもの、石組状の固まりは2～3

か所見つかってはいるが遺構かどうか不詳である。

4. 主な遺物

全体を通して広い範囲に遺物出土は見られたが、集中的に出土したところは久保畑地籍B地区の南側Q列から北側台地先端部D列に限られている。遺構のところで触れた遺物は除いて、B地区の出土遺物、ハネ地籍の出土遺物の概略を紹介する

(1) 縄文時代早期の遺物

これについては溝址2で紹介したほかには他の地籍では出土していない。

(2) 縄文時代後・中期の遺物 (第12・18～26・46～51図、写図25～27)

第12図1の深鉢形土器は、この遺跡調査範囲内唯一の半完形土器で、東側用地堺に接した土壌88から出土したものである。口径40cm、高さ32cmの筒形土器で、口縁は太く作り上げ上面を平らにして沈線をめぐらしている。胴部の施文は方形の区画を構成して、その中に突き刺しの窪みを連続させる文様構成で、筒形器形・文様構成からみて縄文時代中期中葉に近い土器かと思われる。2は土偶の胸部で、頭・腕・腰部が壊されている。L9地籍の茶褐色土中から発見されたもので、所属する遺構は不詳である。3はその近くで発見された土偶の脚部である。

第18図～26図は縄文時代中期と思われる土器の拓本である。26・27・28は口縁部であるが、中には中期中葉・後期のものも含まれているが多くは中期後葉のものと思われる。28図20～32は張りつけ帯の付くもので、主として土壌1・3・6の周辺出土が多い。第21～25図は中期的な破片を集めたものであるが、この中には爪形文を持つ中期中葉の土器もいくらか含まれている。縄文時代後期の口縁等も含まれているが、第25図下段1～21の土器は後期のものを主体に並べてある。主として土壌上面、茶褐色土中の出土が多いが、ところによっては下部黄褐色土中のものもある。これらの土器に伴う石器も多く出土してはいるが、時期分類が困難なために北側D列から南側のQ列に掛けて配置しているので、後半でまとめることにしている。

(3) 縄文時代晩期の遺物 (第12・27～35図・写図28～30)

① 久保畑地籍B地区

第12図4はB地区M9の土壌53から出土した耳栓で、径5cm、厚さ3.5cmの臼形耳飾りで施文等は全くない。5はG7の東壁際の黒色土中で出土した壺形土器の頸部で、表面は濃い青灰色のもので、胎土は灰白色であることから東海地方からの移入品か、あるいは弥生時代

寺所式・阿島式の類かもしれない。

第27～29は縄文時代後・晩期と思われる口縁である。口辺に一条または二・三条の沈線を持つもの、変形工字文・押圧突帯を持つもの・櫛目文様のもの等がある。28図28は三条沈線で丹塗り、33・34、44～48は櫛目文様と押圧突帯・条痕文・口辺縄文状の押引文を組み合わせた水神平系の土器も含まれている。第29図1～12は押圧突帯の大きめなもので口縁に近いところに突帯の付くタイプである。第27・32に見られるように底部は網代瓦痕・木の葉文・引っ掻き文等が観察される。第30～33は条痕系の土器片であるが、口縁に近いところの条痕文は横方向が多いが、胴部・底部になると斜状・交差状のものも多い。総体的に条痕は太めであるが、中には細目のものもあり、弥生時代に近いものもあるように思われる。

これらの縄文時代晩期の土器は、溝址2の上面一帯から北東傾斜面にかけて出土している。とくに溝址中央部分から東側一帯は黒色土の堆積が厚く、台地先端までこの期の遺物出土が多いことから、低地に面する北側一帯にも包含されるかも知れない。櫛目波状文を持つ晩期後半の土器は土壌5・15とその周辺に多い。

② 久保畑地籍C地区（第34図・写図31）

C地区では溝址3からの土器が主である。第34図1～4は押圧突帯のつく口縁、6～10は沈線・突帯のつく口縁、11～29は条痕文の土器片、30～33は網代瓦痕・引っ掻き文のつく底部で、B地区から出土しているこの期の土器と類似して同時期のものと思われる。

③ ハネ地籍（第35図・写図32）

第35図7～31が縄文時代晩期の土器と思われる。7・8・11・12は無文の口縁、9は突き刺しのへこみを持つ口縁、他は条痕文・無文粗製の土器片である。この中には後期のものも含まれるように思われる。

ハネ地籍というのは、旧興亜電工阿南工場の敷地から上方にかけた一帯で、旧来は久保畑地籍と同じような尾根状地形であったものを、工場造成のために西側を削り取り、東側へ盛り土されたものと思われる。敷地造成中に大量の遺物が出土したと伝えられている。国道用地内に一部でも包含層が残されているかどうか確かめるのが今回の調査目的であった。道路予定地東側に当たるあたりの南面傾斜地で、僅かではあったが表土下60cmほどのところで第35図所載の土器、石器（第51図）が出土している。

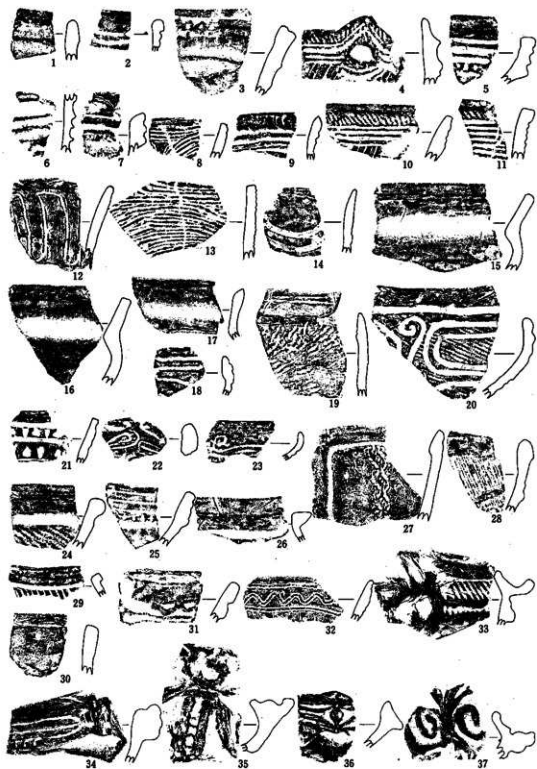
（4）弥生時代の遺物（第36・37図・写図33）

弥生時代の遺物は久保畑地籍B地区とハネ地籍で出土している。ハネ地籍では石器だけ（有肩扇状形石器・石包丁形石器）で、土器片の出土はB地区に限られている。

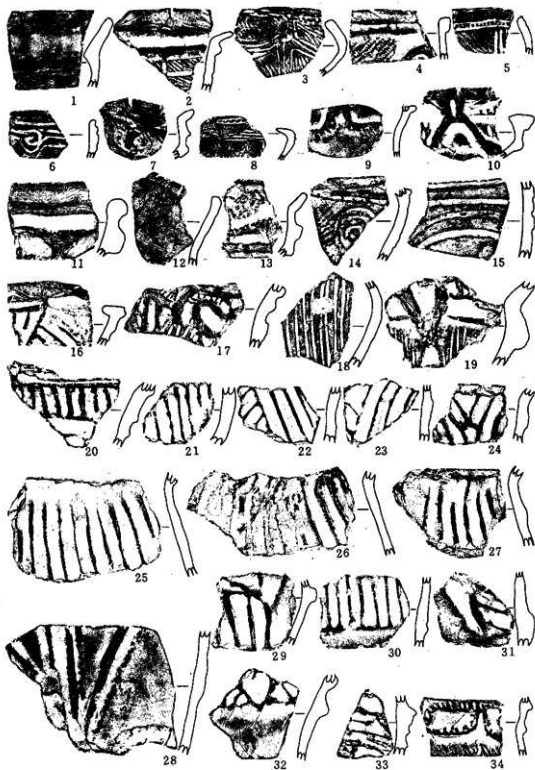
第7図弥生時代土壌群の配置でわかるように、溝址2西南上方一帯とH・I 8列を中心にし



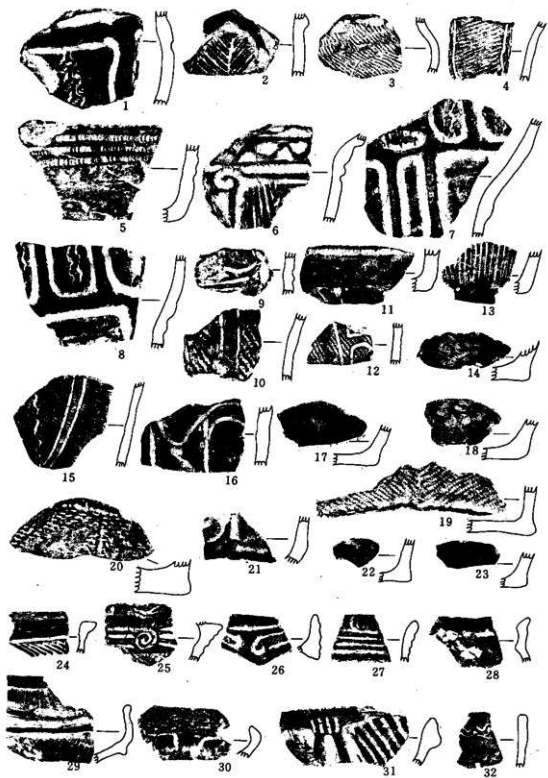
第18圖 B地区出土繩文時代土器(1)(1:3)



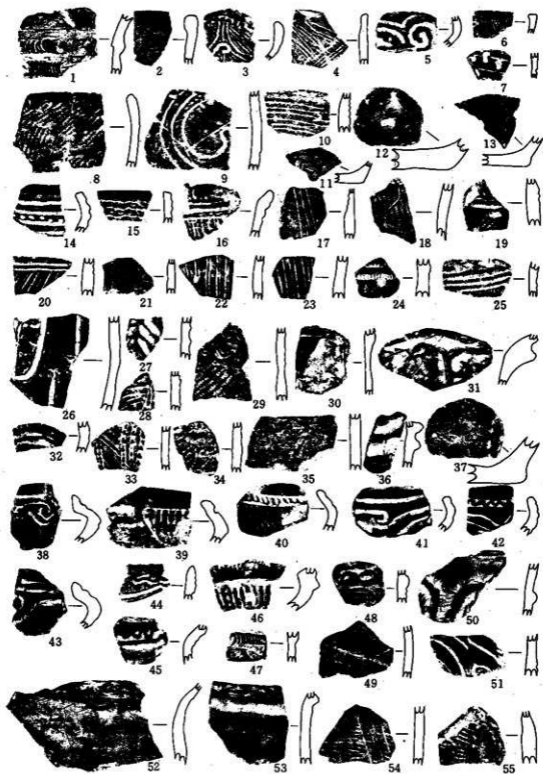
第19图 B地区出土绳文时代中期土器(2)(1:3)



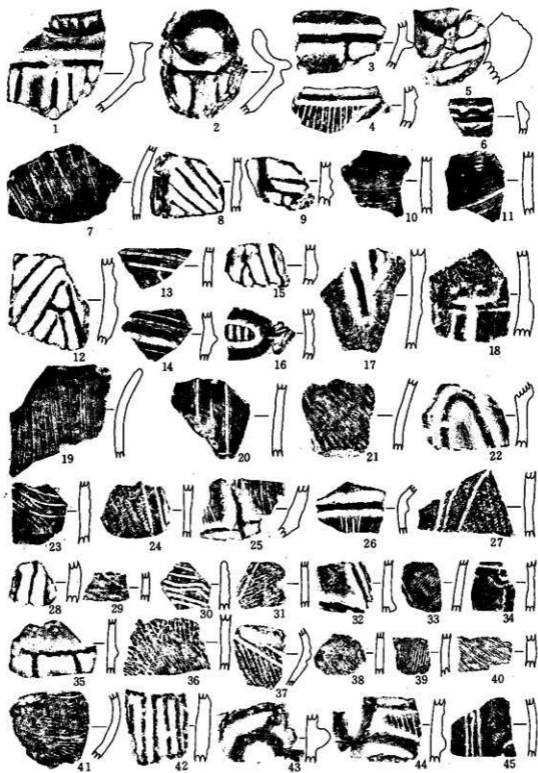
第20圖 B地区出土繩文時代中期土器(3)(1:3)



第21图 B地区出土绳文时代中期土器(4)(1:3)



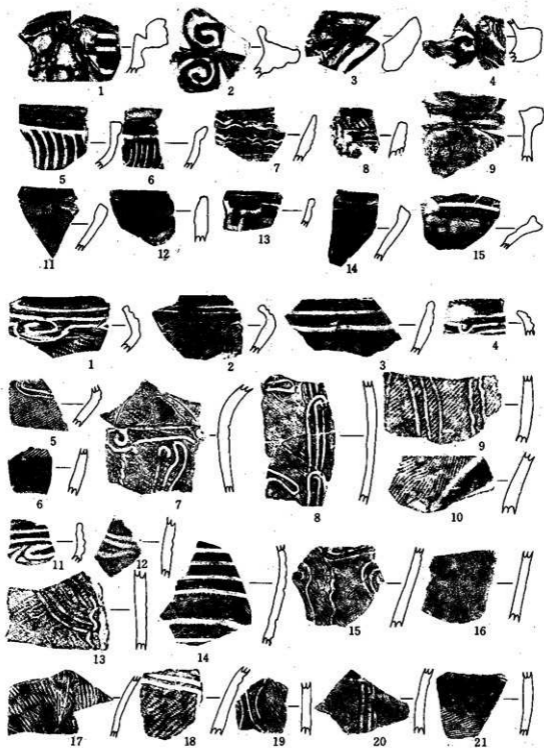
第22图 B地区出土绳文时代中期土器(5)(1:3)



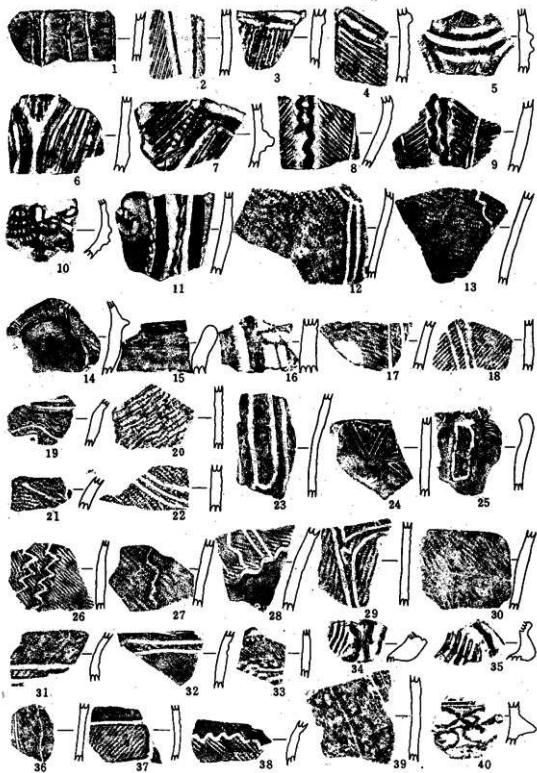
第23图 B地区出土铜文时代中期土器(6)(1:3)



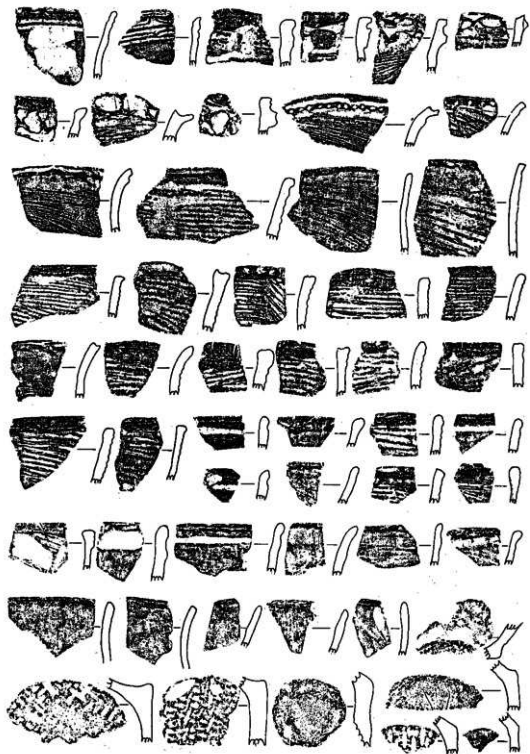
第24图 B地区出土繩文時代中期土器(7)(1:3)



第26图 B地区出土绳文时代中期土器(8)(1:3)



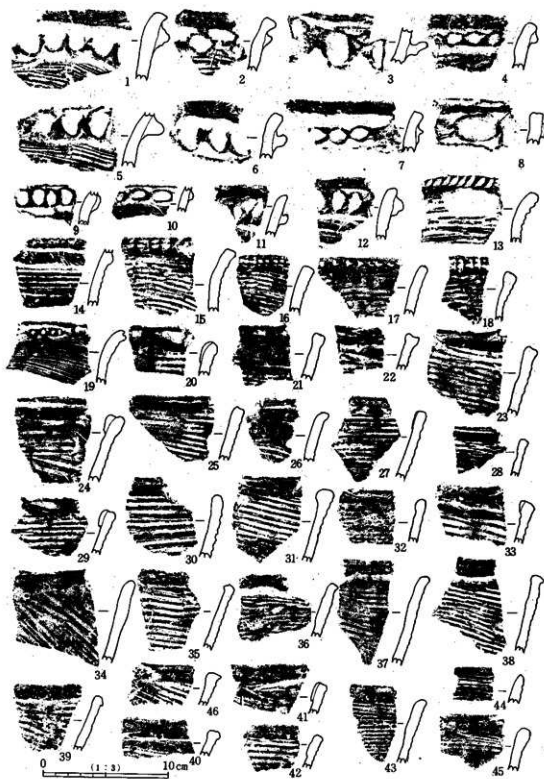
第26图 B地区出土绳文时代中期土器(9)(1:3)



第27图 B地区出土绳文时代晚期土器(1)(1:3)



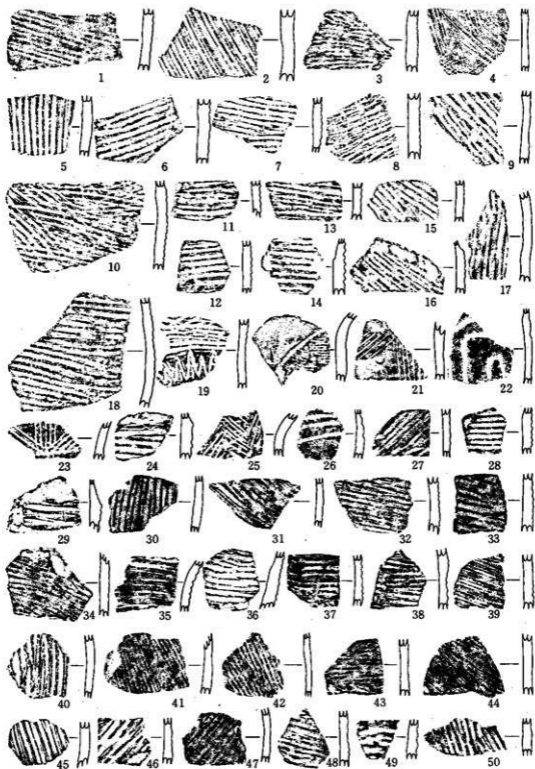
第28図 B地区出土縄文時代晩期の土器(2)(1:3)



第29图 B地区出土绳文时代晚期土器(3)(1:3)



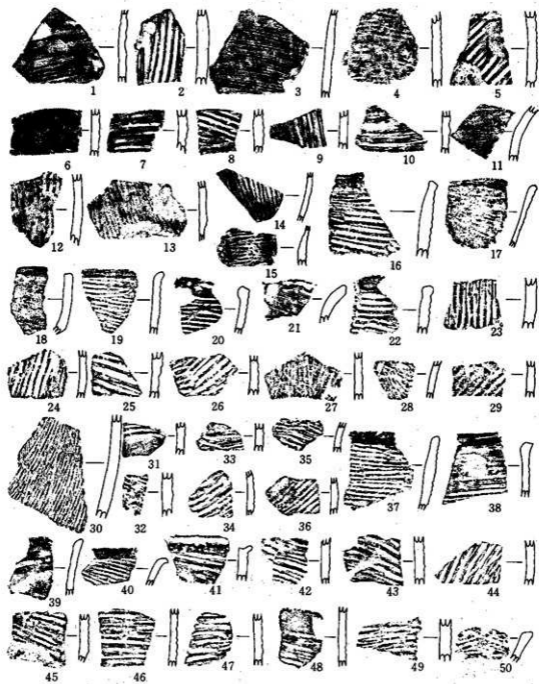
第30图 B地区出土绳文时代晚期土器(4)(1:3)



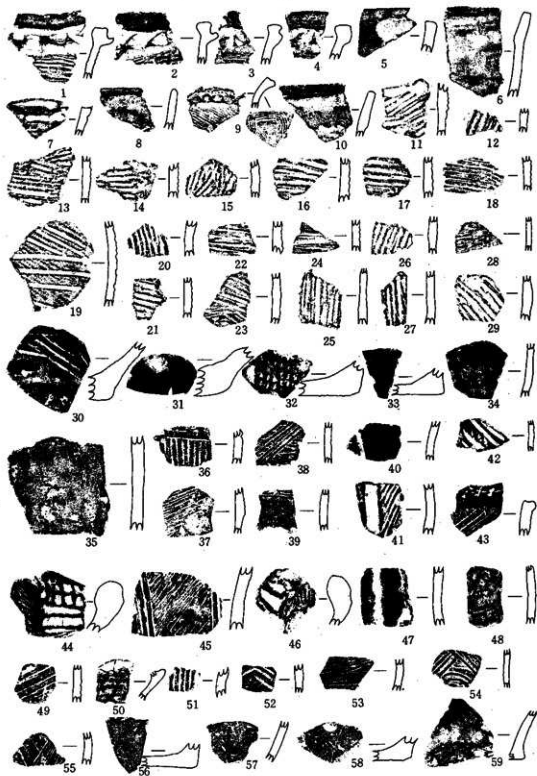
第31圖 B地区出土繩文時代晚期土器(5)(1:3)



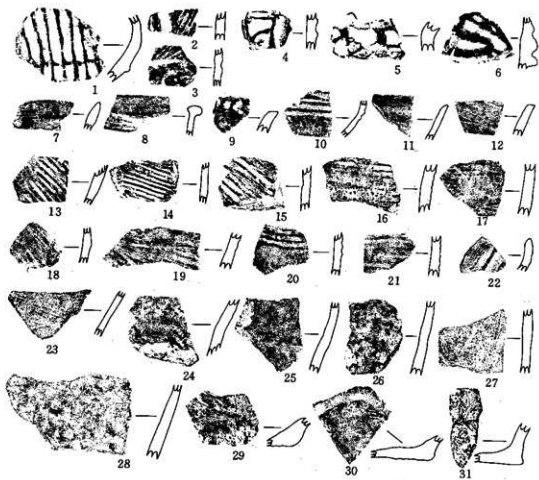
第32圖 B地区出土縄文時代晚期土器(6)(1:3)



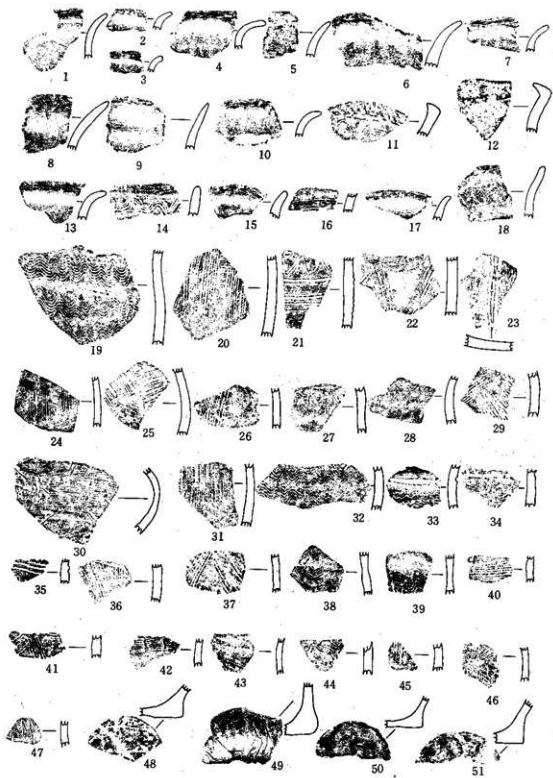
第33图 B地区出土縄文時代晚期土器(7)(1:3)



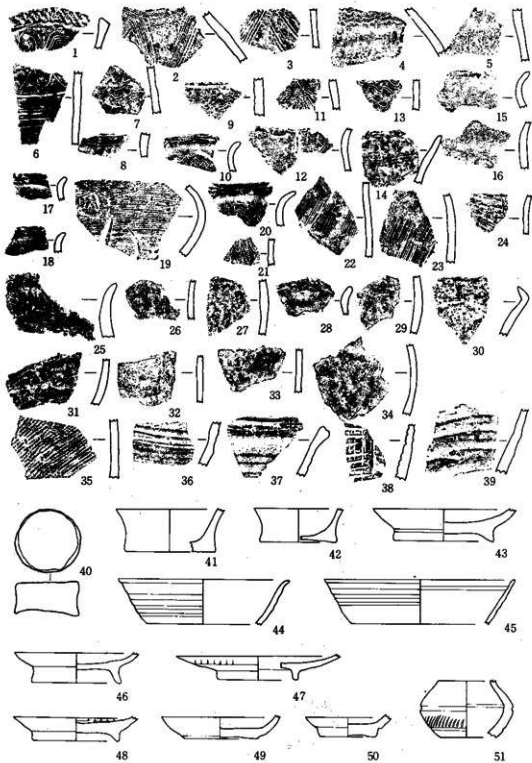
第34图 久保畑地籍C地区出土土器 (1:3)



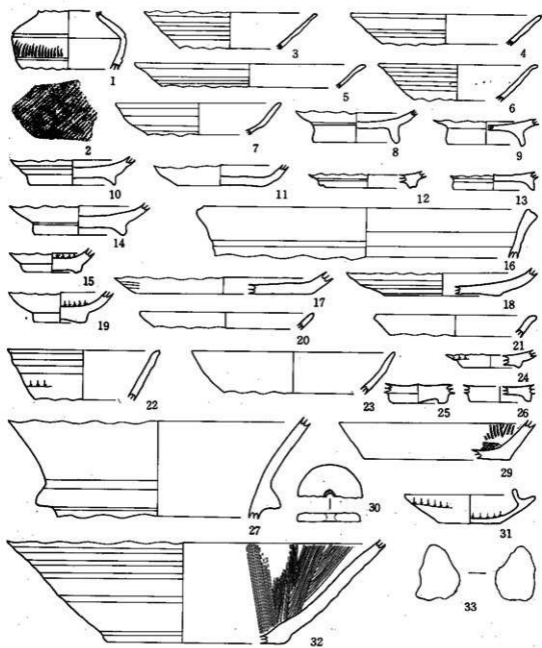
第35圖 ハネ地籍興亞電工工場土手出土土器 (1:3)



第36图 久保知地籍B地区出土弥生式土器(1)(1:3)



第37图 B地区出土弥生式土器と陶器類 (1:3)



第38图 B地区出土陶器(1:3)

た一帯から弥生時代の土器片が集中出土している。第36図1～15・17は口縁であるが、11の縄文施文の口縁、6・8の口縁部の特長から中期の要素を持つものもあるが、多くは後期のものが多い。19～47は土器片で、いくつか中期的な破片もあるが、大部分は横目波状文・平行横目文・縞状文を主体にした土器で、甕形土器・壺形土器の口縁の様相から後期座光寺原式と、それ以前の時期かと思われる。久保畑地籍C地区では調査グリッドではこの時期の遺物は確認されていないが、用地外東側では数片の弥生時代後期の土器片が採集されている。

石器については確実なものとして6点が第50・51図（写図38）に記載している。第50図7・16、第51図19・20で、磨製石包丁・打製石包丁・有肩扇状形石器が出土している。鎌形打石器もあるかと思われるが、時期判別が難しいので区別していない。

(5) 縄文時代中晩期・弥生時代の石器（第39～51図・写図34・38）

石器の出土は久保畑地籍B・C地区、ハネ地籍を含めて300点以上出土している。遺構出土のものもあるがその選別が困難であるので、地区別・地域別に掲載してある。

弥生時代の確実なものは前述したが、次のように形態分類して写真図版に掲載し、各図版には分類番号を小数字で記載してある。

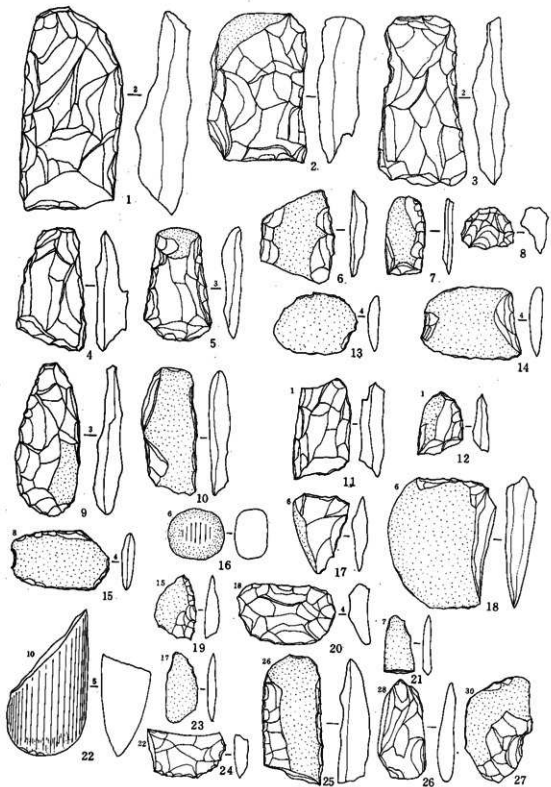
| 形態分類 | 数量 | 図版番号 |
|----------|----|----------------------------------|
| 2（大形打石器） | 18 | 39・41・44・45・47・48・49・51 |
| 3（小形打石器） | 30 | 39・41・44・45・46・47・48・50 |
| 4（緑色石石器） | 12 | 39・40・41・44・45・46・47・48・49・50・51 |
| 5（横刃形石器） | 10 | 41・43・48・49・51 |
| （磨製石器） | 12 | 39・41・44・45・48・51 |
| （石棒形石器） | 4 | 45・47 |
| （打製錘石） | 6 | 41・44・49・50 |
| （弥生石器） | 4 | 50・51 |
| 6（青硬砂岩） | 11 | 42・43・44・46・49 |

1の大形打石器はB地区全域に広がり、出土土層は上部黒色土・茶褐色土層に多い傾向がある。青灰色の硬砂岩製の打石器も同様の傾向である。小形打石器は下部の黄褐色土層中の出土が多い。小形の磨製石棒状石器は、北東側の黒色土層中下層に多い。他の石器については余り区別がないように思われる。

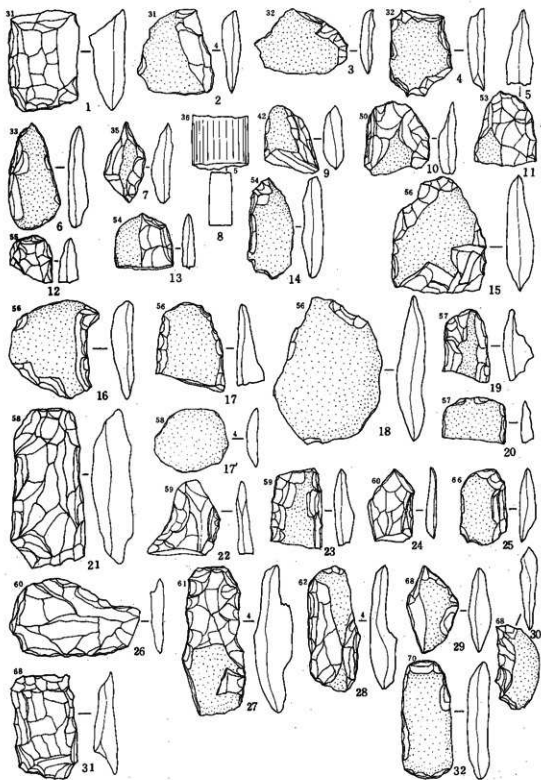
(6) 中世・平安・古墳時代の遺物 (第12・37・38図・写図34)

第12図8は、C地区溝3の西南縁で検出された土壌 106の上面から出土した天目茶碗である。口径11.5cm、高さ 5.5cm、鉄軸かかりのものである。周囲から近世と思われる陶器片も出土している。

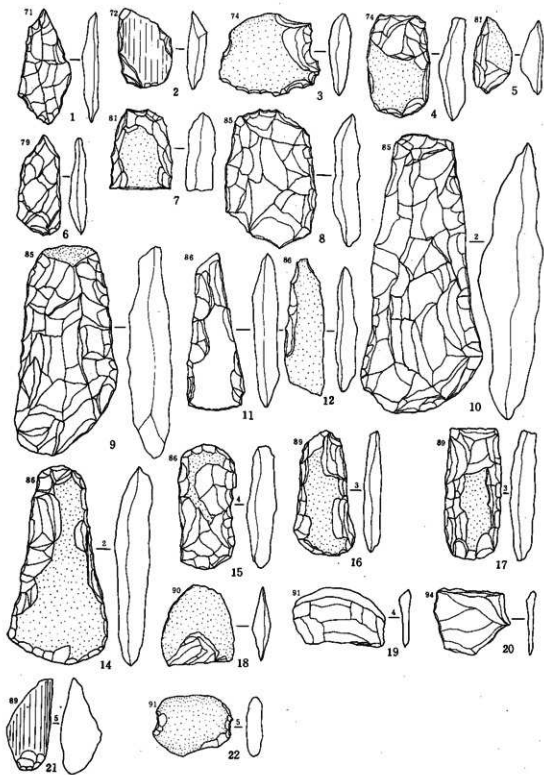
第37図・38図は古墳時代・平安時代・中近世の陶器で、37図51は須恵器小壺、35は須恵器の破片、第37図44～47・第38図3～9は平安時代灰釉陶器片、第37図36・37・39は山茶碗片、38は瀬戸灰釉オロシ皿の破片である。他は中世・近世の陶器片である。大部分がB地区溝址2の上面西側から北側急斜面にかけての一带で出土している。とくにD・E・F列の一带は黒色土の堆積が厚く表土下2mほどのところから相当量の平安時代灰釉陶器片・中世陶器片が出土している。



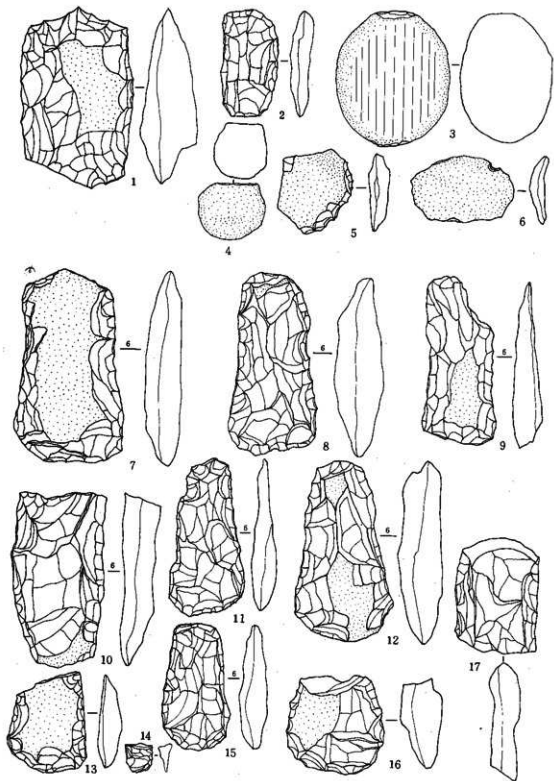
第39圖 石組下・土境1～土境30出土石器(1:3)



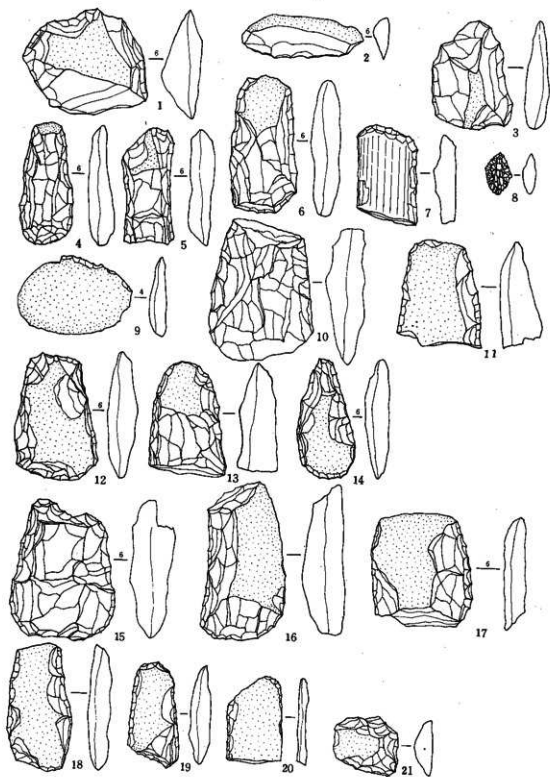
第40图 土坑31~土坑70出土石器 (1:3)



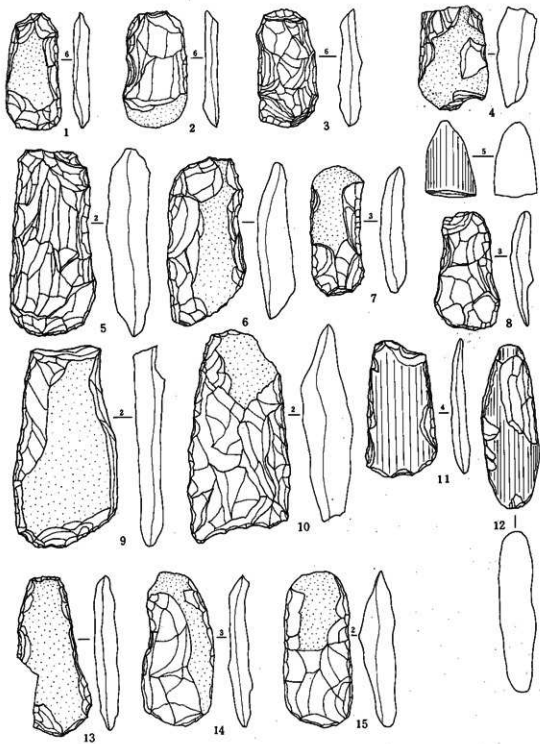
第41圖 土城71~土城91出土石器 (1:3)



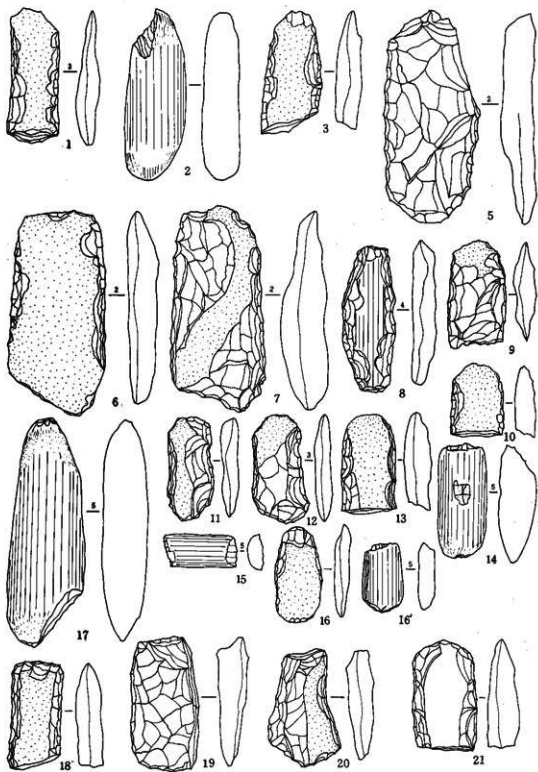
第42图 B地区清址1·C地区清址3出土石器(1)(1:3)



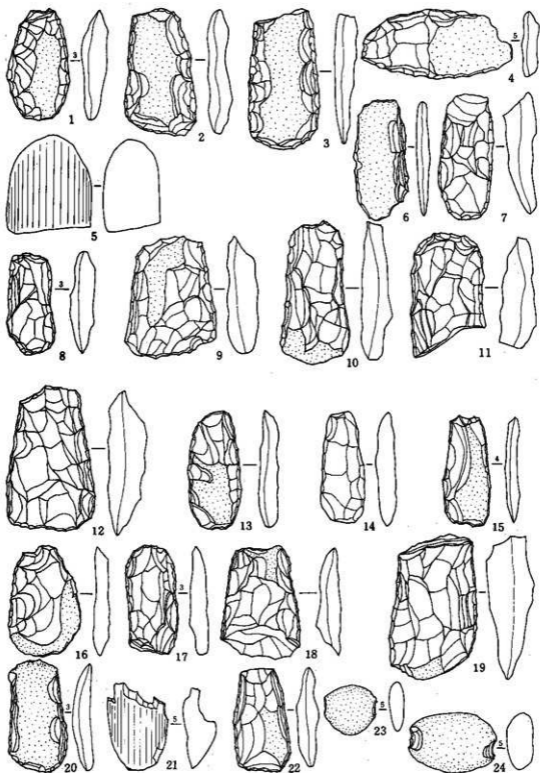
第43图 C地区薄址3出土石器(2)(1:3)



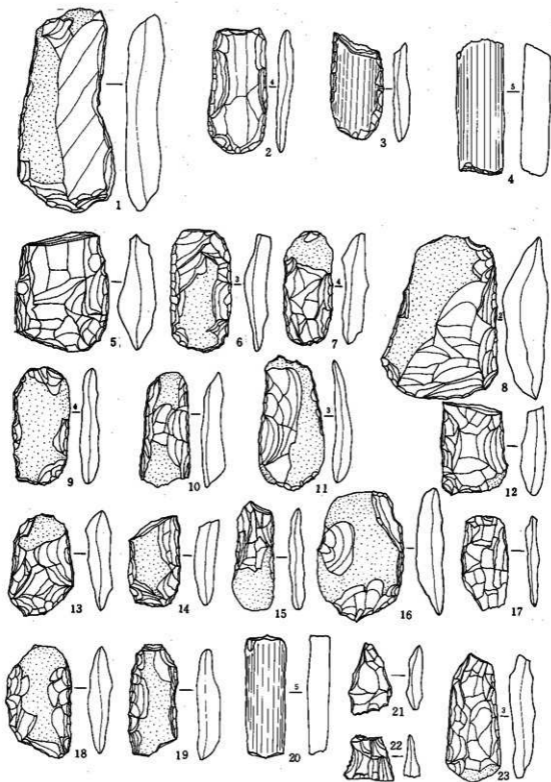
第44图 B地区B~E列出土石器(1:3)



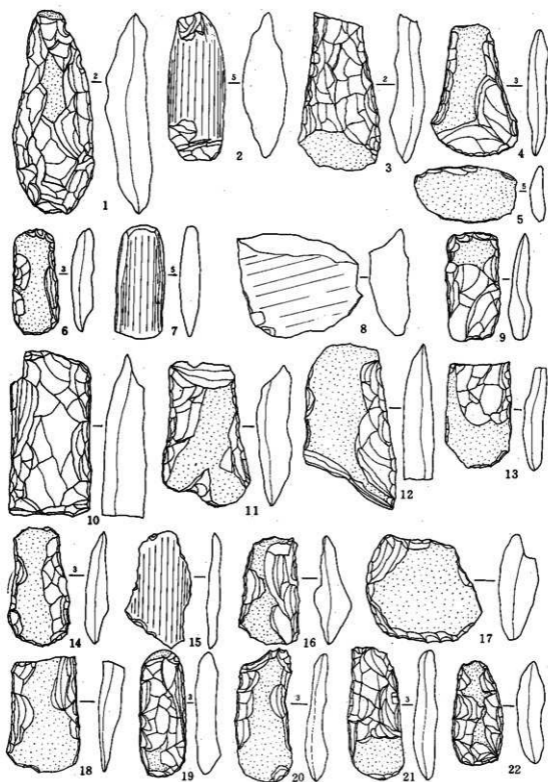
第45图 B地区F列出土石器(1:3)



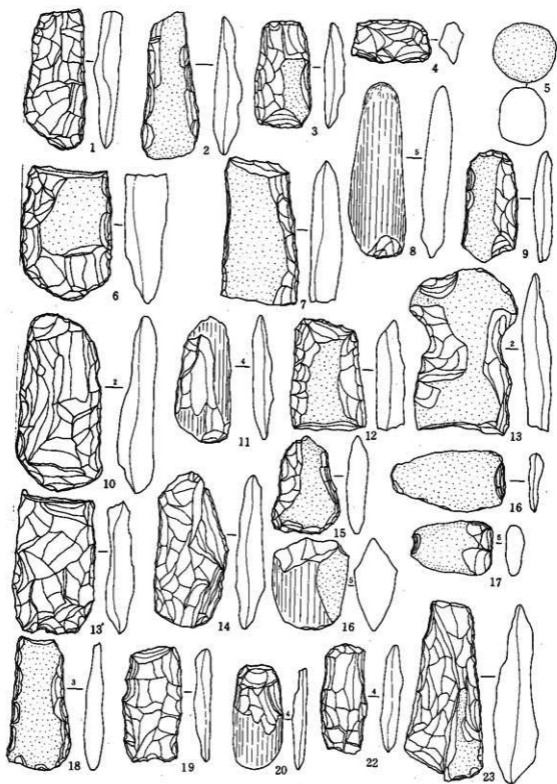
第46图 B地区F~G列出土石器(1:3)



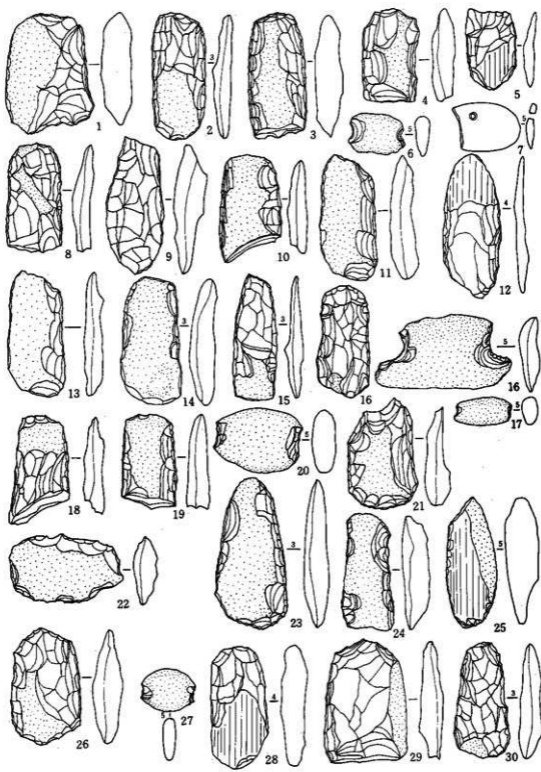
第47图 B地区G~H列出土石器(1:3)



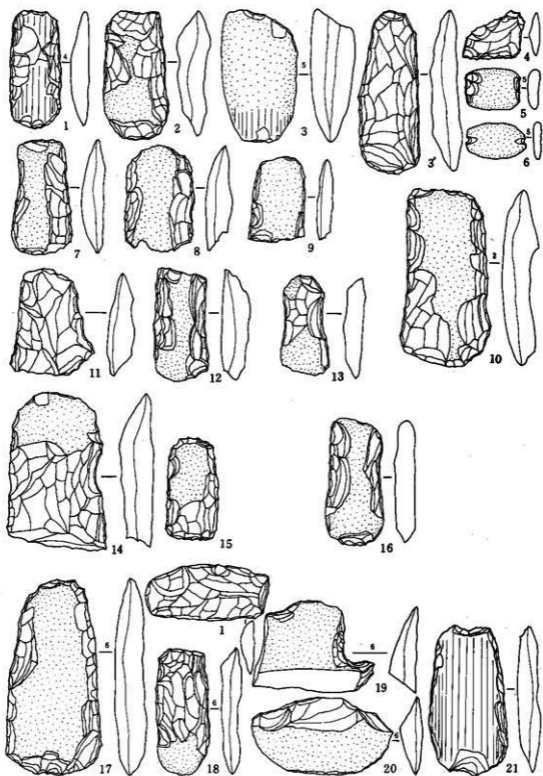
第48图 B地区H~I列出土石器(1:3)



第49图 B地区I~J列出土石器(1:3)



第50图 B地区K~N列出土石器 (1:3)



第51图 B地区O~V列・八木地籍出土石器(1:3)

IV 調査のまとめ

1. 広範囲に亙る遺物出土地

早稲田遺跡は地形的に見ると傾斜面が多く、一般的には大きな遺跡とは考えられないが、数次に亙る発掘調査により下伊那地方でも有数の遺跡と考えられるようになった。とくに、久保畑地籍溝2で縄文時代早期の土器・石器が検出されたこと、宮下地籍・ハネ地籍・久保畑地籍B・C地区では大量の縄文時代晩期の土器が集中的に出土し、竪穴址・土壌群・溝址が検出されたこと、弥生時代の遺物はとくに多いとは言いがたいが、久保畑地籍B地区では相当量が集中しているので、この時代の生活址があるものと思われること、久保畑地籍・ハネ地籍では中世の遺物出土は少なかったが、以前に発掘調査した宮下地籍の中世遺物多量出土等と合わせ考えると、早稲田遺跡は各時代多岐にわたる主要遺跡の様相が調査の度に検証されている。以前に行われた分布調査、その折々に試みた日影地籍の表探調査により、宮下・久保畑地籍のような濃厚地籍がまだほかにもあると推量される。

2. 溝址2と縄文時代早期の遺物発見

B地区で検出された溝址2は極めて雄大な溝址で、その溝底に近い辺りから縄文時代早期の土器・石器が200点ほど出土したことは、下伊那地方でもそう例のあることではない。しかも器形の知れる完形土器の出土はなかったが、溝縁に土器集中地があり、完形石器・割片石器・石核等が集中し、アンピル状の平石の配置等が推量されることから、ただ単に溝に落ち込んだ遺物ではないと思われる。この溝を利用した人々の生活址が近くにあるであろうと思われる。

この溝址2は表土下3mほど下層にあることから、普通の発掘調査では検証しないで調査を終わる例がままある。幸い、阿南町教育委員会・飯田建設事務所の深い理解があって、二次次に亙る発掘調査が計画され、溝址検出に相当日数を掛けることが出来たことがこの調査を成功させる大きな要因があったことを忘れてはならない。

深い溝址が長い年月のうちに埋められ、その堆積層の上に縄文時代中期・縄文時代晩期・弥生時代の生活址・土壌群が重複していたことも、今まで他に例を見ない検証結果でもある。早稲田地籍のように傾斜面の多いところであるから、現在の地形でも各所に侵食された低地が存在している。久保畑地籍でもB・C地区の接点辺りを台地の頂点として、北・南に面するところと思われたが、B・C地区ともに大きな溝が存在し、地形を更に細分していることが窺われた。溝の存在時期の違いはあるが、このような地形のところで起こる自然の姿かもしれない。そうすると、久保畑地籍だけでなく他の地籍にも類似の大きな溝址の発見があるのかもしれない。ハネ地籍にも似通った場所が見付かっている。

3. 縄文時代晩期の遺物集中

久保畑地籍ではB・C地区にそれぞれ二か所縄文時代晩期遺物の集中地があった。ハネ地籍でも狭い範囲ではあったがこの時期の包含層が確認されている。この場所は旧興至電工場敷地造成により台地が削り取られてところで、時期は不詳であるが土器が大量出土した言い伝えがあり、東側斜面にある日影地籍では縄文時代後・晩期の土器片が多く表採されるので、この台地も主要な遺跡と推量される。以前に発掘調査された宮下地籍では竪穴址が検出され、大量の縄文時代晩期の土器・石器が出土している。これらを合わせ考えると、現在のところ縄文時代晩期の遺物集中地が四か所確認されたことになる。多少の時期差はあるとは思いますが、北信系の工字文・浮線網状文系の土器片が少量含まれ、多くは東海系の条痕文を主体とするもので、榎王式・水神平式土器が出土する共通点を持っている。

縄文時代晩期という時代は、北九州に伝播した稲作文化に先行する時代で、やがて東海・三河地方から下伊那南部地方へ流入する文化経路をたどる重要な時期でもある。天龍川を遡ったり、峠道をたどりながら南部地域を通り、やがて飯田盆地へ伝えられて弥生時代前期・中期の稲作文化が花開く橋渡しの時代でもある。

旧来は天竜村向方上の平・平岡満島南遺跡、秦草村大畑遺跡等が知られていた。近年になって根羽村・亮木村・阿南町新野・同和合・同和知野・同早稲田・下条村等で縄文時代晩期の主要遺跡が確認され始めている。飯田盆地でも発掘調査が進むにつれて大量出土の遺跡が年々増加している。それと共に、弥生時代前期の遺跡も発見されて、この縄文時代晩期の遺物と同伴する例も多くなっている。水神平式土器は、見方によれば弥生時代前期に当たる時期のものであるから、早稲田遺跡で水神平式土器が宮下地籍・久保畑地籍で発見されていることは極めて重大な発見と言わざるを得ない。

4. 早稲田遺跡の保護

早稲田遺跡の持つ重要性は今回の発掘調査だけで論証され得るものではない。縄文時代晩期の問題だけでなく、早稲田神社にまつわる中世遺物の大量出土も極めて重要な要素を含んでいる。地形的に傾斜地であるが故に縄文時代晩期の重要な遺跡であるとも言える。国史現在社の早稲田神社があるが故に中世遺物が多いだけでなく、関氏・下条氏の重要拠点でもあったからこの地が又重要な遺跡となっている訳である。そのために傾斜地や窪地にも重要な遺跡が埋没しているのが早稲田遺跡の特長でもある。

国道改修が進んだ現在、この地域が更に開発されるに違いないので、その開発に伴ってこの重要な遺跡が、保護措置なしで煙滅することのないように強く願っている。



1. 田上より早稲田遺跡を望む



2. 久保畑地籍グリット掘り

写真2
ハネ地籍と久保畑地籍C地区



1. ハネ地籍の土層と土手の包含層（中央上早稲田神社）



2. C地区の草刈り作業

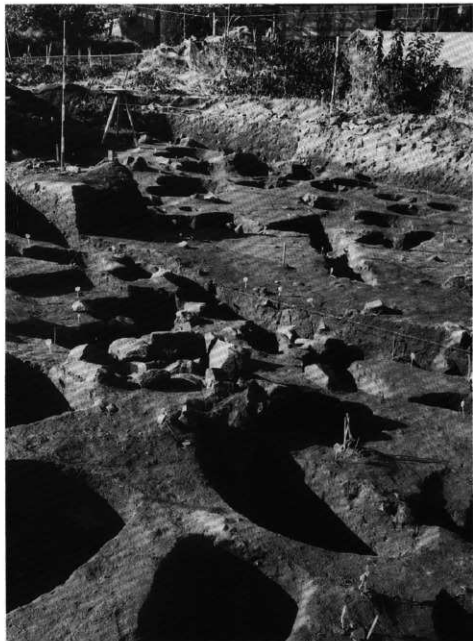


写真3 B地区土壌群(1) 東から西

写真 4 B地区土坑群(2) 北から南





1. 西側の土壌群(手前土壌6)

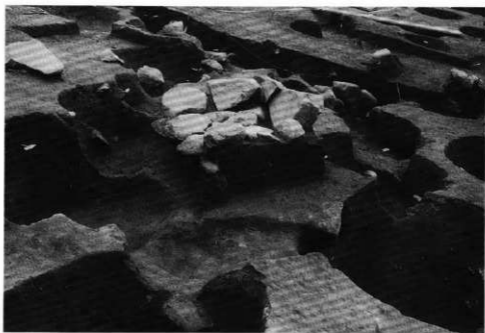


2. 東側の石組と土壌群(南から北)

写真 6
石組 1 と下層の土壌群



1. 石組 1



2. 石組 1 と下層の土壌群 (東から西)



1. 土城3・6・4・5・1・10



2. 土城5・22・7周辺



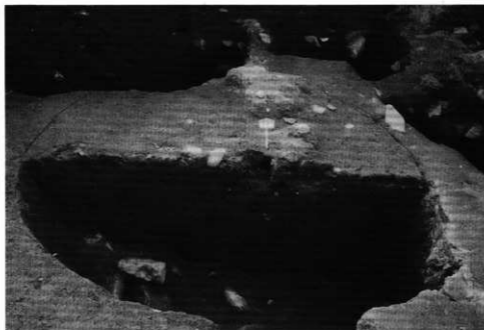
1. 土坑4



2. 土坑10



1. 土城1



2. 土城2

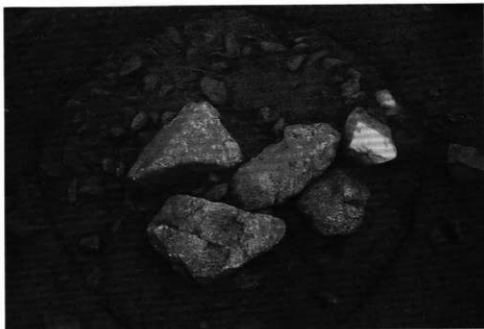
写真10
土壌12ほかと土壌83



1. 土壌11・12・15



2. 土壌83

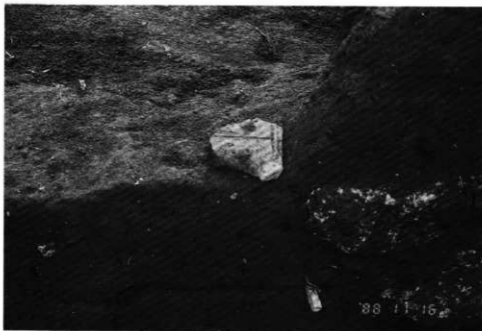


1. 土壤102の集石



2. 土壤105・104

写真12
土偶と石棒出土状況



1. 茶褐色土中の土偶



2. 黒色土下部の石棒

写真13 溝址2の西側全景



写真14 溝址2西南縁の転石群





1. 西側の土層断面



2. 中央部下層の断面

写図16 東側I・H8列の土層断面



写図17 東側I・7下層の土層（早期土器集中地）



写真18
溝址2の東北部



1. 東側の下層



2. 東北側の上面

写图 19
沟址 2 I 7、早期土器集中地



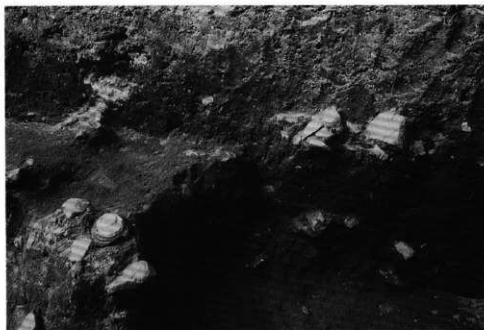


1. 中央から西側



2. 西側土層断面

写真21 溝址3の西側の土壌（火葬墓）



土壌106

土壌107

写図22 C地区旧道跡





1. 上方土層調査

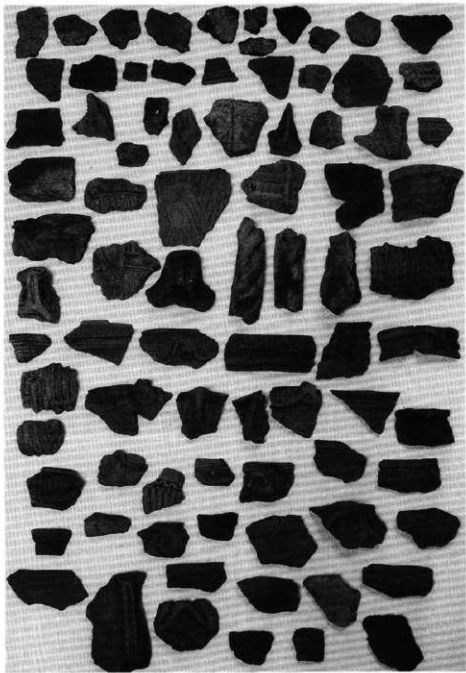


2. 旧興亜電工工場南側の遺物包含層

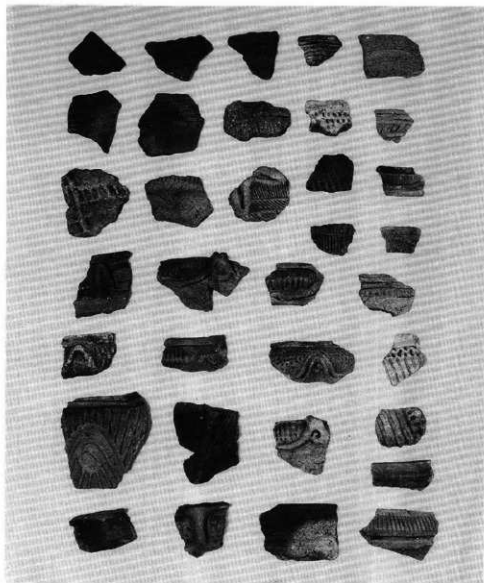
写図24 深鉢・壺頸部・耳栓・土偶

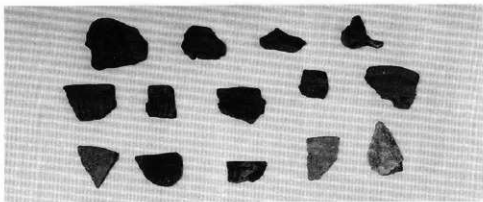


写图25 B地区出土縄文時代早期・中期土器口縁(1)

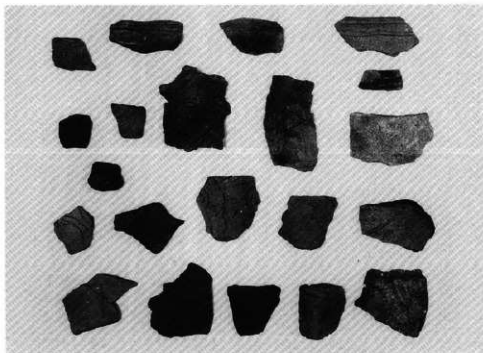


写图 26 B地区出土縄文時代中期土器口縁(2)



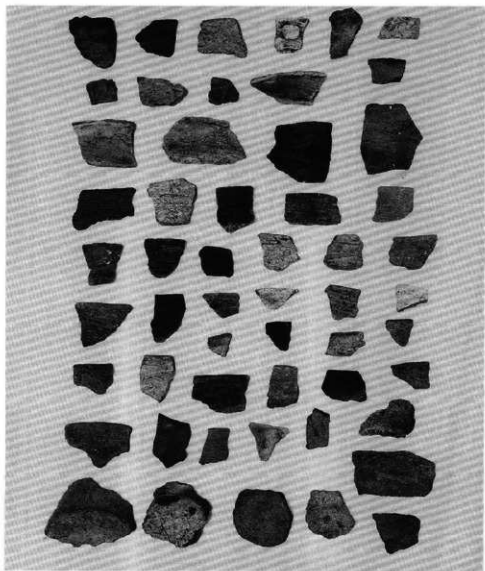


縄文中期把手口縁

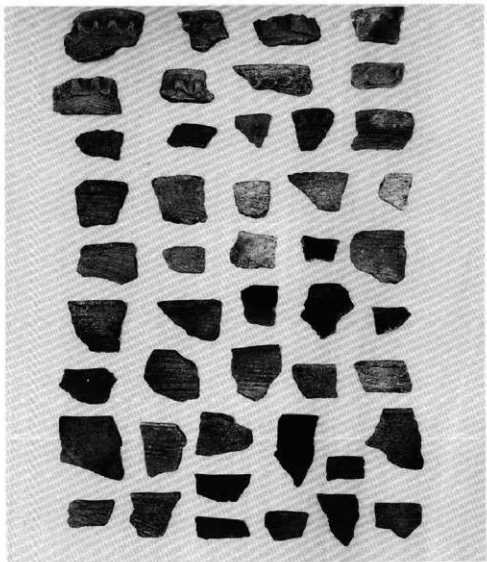


縄文時代後期

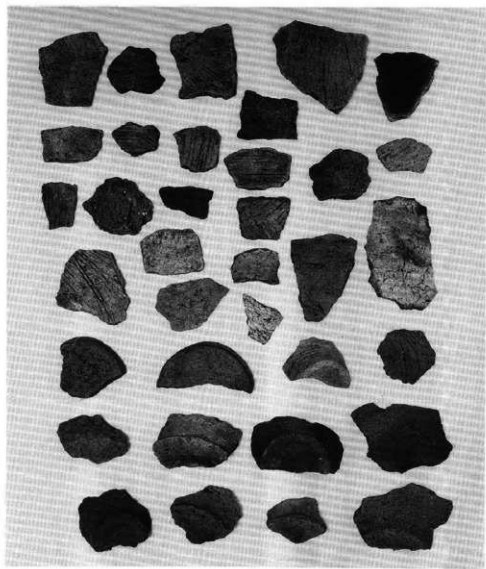
写图 28 B地区出土縄文時代晚期土器口縁(1)と底部



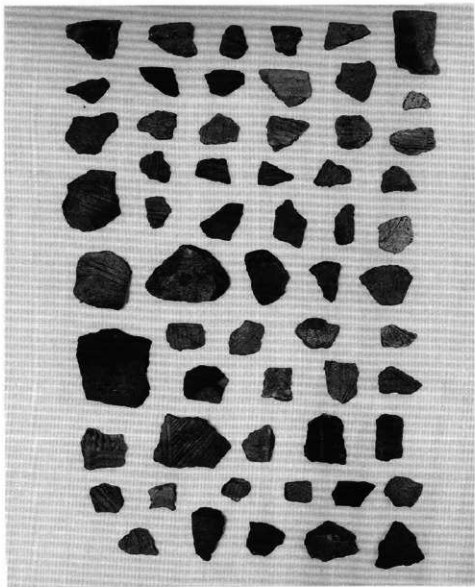
写图 29 B地区出土縄文時代晚期土器口縁(2)



写图30 B地区出土縄文時代晚期土器片と底部

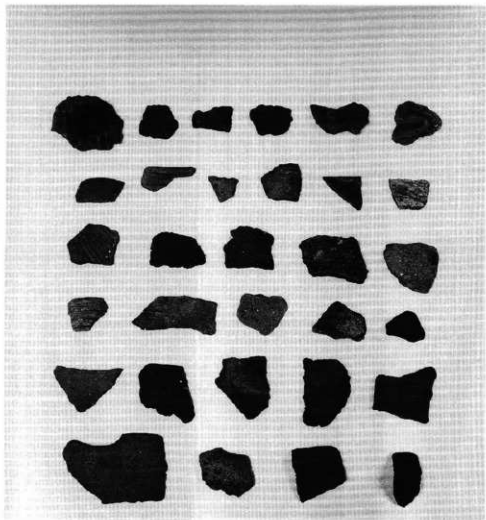


写图 31 C地区・溝址3出土土器

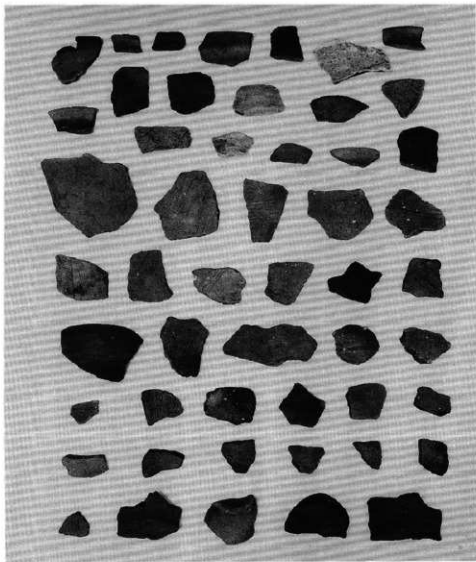


写図
32

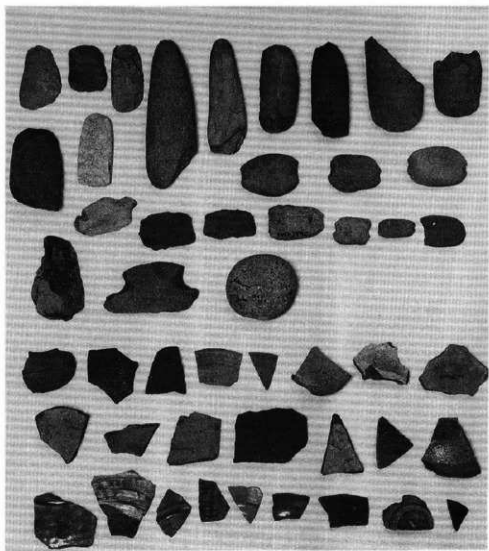
ハネ地籍出土の土器



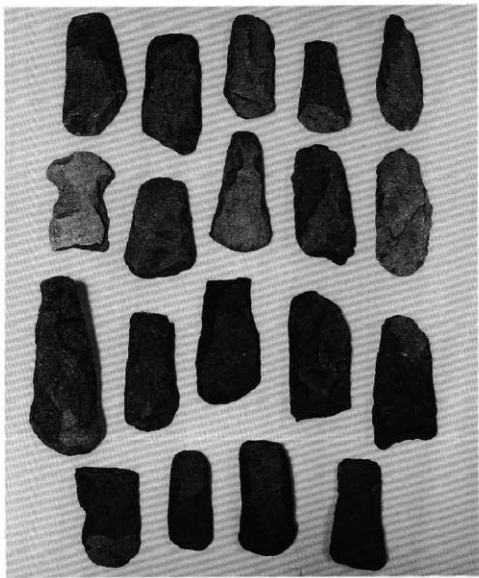
写图33 B地区出土弥生时代中・後期土器



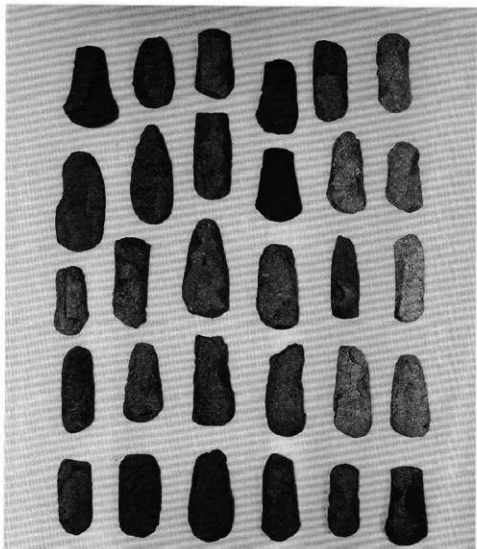
写图34 B地区出土石器と古墳・平安時代中世陶器

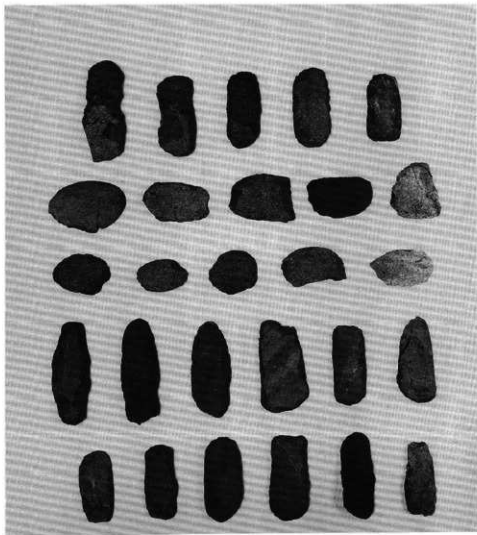


写图35 B地区出土大形打石器



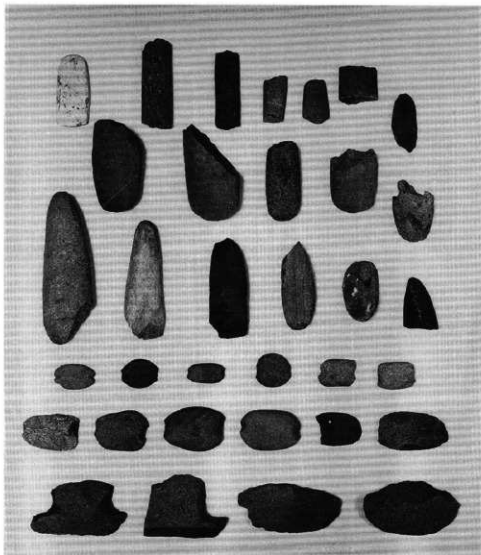
写图 36
B地区出土小形打石器





写图 37 B地区出土小形打石器・横刃形石器・綠色片岩石器

写图 38 B地区出土石棒・磨製石器・锤石・弥生時代石器



写图39 久保畑C地区・八木地籍出土石器

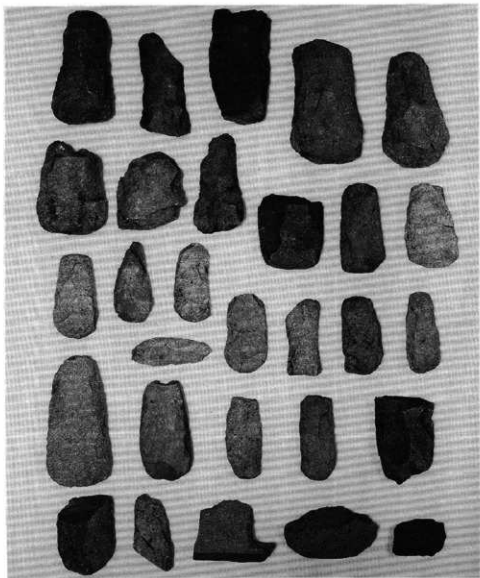


写真40 溝址3下層の検出作業



写真41 土壌群検出と溝址3検出の作業



早稲田遺跡 その3 阿南町西条早稲田久保畑・ハネ地蔵

平成4年3月

発行 長野県飯田建設事務所
長野県下伊那郡阿南町教育委員会

印刷 新葉社
飯田市常盤町飯田商工会館内

